

---

# 猛虎龍之介

栗林

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猛虎龍之介

### 【Nコード】

N7289I

### 【作者名】

栗林

### 【あらすじ】

その昔坂上龍之介という男がおった…

男はその強さから『猛虎龍之介』と謳われていた。

だがそんな彼に悲劇と新たな人生が待ちうけていた…

## プロローグ

その昔、1人の男がおった。

その男は強くたくましく、戦場では華であった。

「……」

「さかがみのりゅうのすけ坂上龍之介!!!その首賞ったアア!!!」

「!?!」

カァン!!!

「なっ!?!」

男は並の男が扱う剣などあっさりとはじいてしまった。

あまりの強さに『もつくりゅうのすけ猛虎龍之介』と呼ばれていた。

そして……弱者を無闇に殺やろうとはしなかった。

「行け!貴様はまだワシに殺される实力ではない。もっと修行するんじゃ!」

「お…恐れ入りました!!!」

髭面に身分の高そうな兜をかぶった坂上龍之介はまさに最強であった。

…あの日までは。

龍之介は優雅に山中を馬で駆けていた。

「よこせー!!!」

「ぶん!!!」

時には山賊と戦い、時には自然に立ち向かい。  
そんなある日の事だった。

実を言えばここは異世界日本。

世は秩序無き乱世、そんな中彼は天皇の勅命でとある場所へ皇道派の真坂へ親書を渡しに行こうとしていた。  
部下に野原蝉磨のはらのせみまろを率いて。

「……坂上殿、これで国がまとまるといいですね」

「もう100年か、ワシはもちろんそんな年ではないがいい加減乱世はこりこりだ。早く統一せねばこの国は滅びてしまうだろう」

「なんとしてもやりとげましょう」

「ああ、まで。ワシ小便がしたい」

「ええ！？知らないですよ女の子に見られても！！！」

「ハッハッハッ！！こんなところに女子はおらん！！」

「あつ！でもそこ崖！」

「ハッハッハッ！！ワシは猛虎龍之介じゃぞ！？崖から落ちて死す事はな……」

その時龍之介の足元が崩れた。  
もちろん龍之介は落下してゆく、目をまん丸にして驚きながら落ちていった。

「あれええええええ！！！！！！」



「アッー！！なんだ道下」

「アッー！アッー！アッー！」

某男に興味がある高校生にそっくりな男と某いい男にそっくりな男がなにかが落下するシーンを目撃した。

2人は全裸で向うと……人がういていた。

「ウホツ……いい……ってなんだ、女か」

「俺達は女には興味ないぜ」

「ちえっ、じゃあいつもどおりその常夜燈でいい男が来るの待って襲おうぜ」

「ああ、お前もツナギをきるんだ」

「はい！鈴木修理工！」

ホモ2人組みは去っていった。

やがて人々が集まってきた、女の子が海に浮いているという通報をうけて警察や救急車などもかけつけた。

「まだ息がある！早く病院へ！」

「了解！」

…

⋮

⋮

⋮  
「……起きろ！！猛虎龍之介！！」

「なんじゃ？……はっ！貴様は誰じゃ！！」  
龍之介は自慢の槍を構えた、周りは全部白い風景であった。  
するとそこへ変な爺が現れた。

「ほへえええ、おみゃーが坂上龍之介だがや？」

「……確かにワシは坂上龍之介じゃが、爺さんは誰？」  
エセ名古屋弁をばやす爺さんはものすごい長い白い髭に変な格好を  
していた。

「ワシか？ワシヤ神だよ」

「神！？神様ってこんなじゃったか！？」

「こりゃ失礼だそ！おみやーさんをワシは特別に生き返らせてやった、もつとも元の世界にはもどせんがな」

「はあ？あの神とやらワシはなにがなんだかさっぱりなんじゃが？それよりも真坂にこれを渡さなくてはならな……」

「よし、とりあえず逃げ……！」

「い……逝く！？字がおかしいんじゃない……うおおおおお……！！！！！！！！」

龍之介の視界が段々狭くなっていく、そしてすべてが真っ白になったと思つたら真っ暗になった。  
彼は目を覚ました……

「……んん……ん？……ここはどこぞ？」

そこは龍之介が知らない見知らぬ場所であつた。

しかし見知らぬ場所にしても生きているという実感はあつた……彼は自然に笑いがこみ上げてきた。

「ぐふ……ぐふふ……ブワッハッハッハッハ……！ワシは生きておる……生きておるぞ……！この勇ましい体……！厳格ある顔……！そして武士のすばらしい手……！ハッハッハッハ……ハッ……」

彼は気がついた、まるで子供のように小さい手、子供、しかも女の子のように高い声。

腕も触つてみたがなんかやわらかいうえ毛もない。

喉を触つてもアレがない。

そして一番驚いたのはアレだった。

「まさか……」

ズボンの中に手をつこんでみた……するとある重大な事に気がついた。



「……」  
その時龍之介はなにか思ったのか突然起き上がりどこかへ向った。  
(こんな所にいてられるか！！それよりワシの槍は！?)  
たまたま海岸にいったらなんとあつた。

偶然見つからなかったのか龍之介の槍は現在であつた。

「あつたどああ……って叫んでも仕方がないんだよな、おまけに  
蟬磨はおらんし……重いし!!」

幼女になつて力がなくなつたのか龍之介はまったく力が出ない。  
その為軽々と振り回していた槍がとても重く感じていた。

「ぬうう!!」

「ぐふふ……かわいい女の子……」

「ん？お主は誰じゃ？」

目の前に現れたのは眼鏡でデブでしかもブサイクで臭い男であつた。  
顔はニキビだらけでいかにも女性に持てなさそうな感じだ。

「かわいいね、1人？……おじさんとここない？ジュース買ってあげるよ？」

「なにを買つと!？」

「ジュース」

「なんだそれは!？」

「ジュースも知らないの？飲み物ですよ？」

「うまいか!？」

「うまいよ、何味が好きかなお嬢ちゃん？」

「く…くれ!!ワシは腹が減った!!喉が渴いた!!」

「じゃあ…」

「待ちなさい!!」

しかしその時、キモイ男の後ろから声が聞こえてきた。

その後ろには黒髪でツインテールの女の子が立っていた。

「ああ!!」

少女は携帯を持っていた、まあ龍之介にはわからないだろうが。

「そんな幼い子狙ってどうするの栗田」

「お…お前は中学の時一緒だった愛原!!そういえばお前俺と同じ鞆の裏高校をつけてたな…まずい通報しないでええ!!」

「もつめんどくさいけどとりあえず通報しとくわ」

「なんだ?その様子だとお主悪者のようじゃの」

龍之介もようやく栗田という男に実態に気がついた。

いよいよ栗田はピンチになった。

「……お…お嬢ちゃん……好きだああああ!!!!」

こっちに走ってきた、龍之介は間一髪でかわした。

「!?!」

さてさてなんかしらないけど始まっちゃったこの物語。

はたして猛虎龍之介の運命はいかん？

## プロローグ（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

なぜ書いた？…幻想の零戦も西方派遣軍もシリアスだからとりあえず変なのを…

## 第一話 猛虎早速の危機なるぞ

「すすす…好きダアアア!!!」

「何奴じゃこやつは!」

幼女姿の龍之介を狙う栗田、決して敏捷性は高くないが身体能力が子供同然の今の龍之介には速く感じる相手だ。

幸い視力は低下しておらずかなり速い動きでも見えるし気配もすぐ感じられるのだが根本的な身体能力は見た目どおりだ。

ちなみに今の龍之介の身長は115.2、小学1年生女子としてはまあ平均的である。

だがこんなのだったら簡単に想像がつく、ちつとも強くない事が。

「かわいい!好きだああ!!!」

「貴様、ワシは猛虎龍之介じゃぞ!?その無礼な態度を叩きなおしてくれるわ!!!」

龍之介は槍を構えやる気は十分であった。だが。

(重た!!!)

「えっ!?!えっ!?!?」

愛原とかいう少女は迷っていた。

龍之介は微笑をうかばせていた。そう、今の彼女(?)の頭の中は男の時の猛虎龍之介であった。

それだつたら並大抵の男にも負けない強い男である。

しかし今の体は小学一年生レベル、身体能力もたいたいそれぐらい。

「食らえ！！無双大三段じゃあ！！」  
出た！龍之介の必殺技、口 サガにでもでてきそうな技名だが龍之介の必殺技『無双大三段』は渾身の力を込めて叩き下ろし、続いて鋭い突きそしてフィニッシュに槍を回して柄で傷口をえぐり、上空へ飛ばす。その後、敵は地面に叩きつけられて多大なダメージを受けちゃうというやり方までそんなままであった。

しかし実際この技で幾人も屠られている。  
でも今の龍之介の体は子供、こんな技使えるわけがない。  
「うおっとうっとうっ！！！！あわわわあああ！！ぎいえ！！」  
バタッ！！

槍の重さに体がついていけず倒れこんでしまった。  
「へへへ………そういう失敗する所もかわいい……もう僕のものだよ、マイハニー」

「ちちち……近寄るな！！ワシは男じゃぞ！！このガチホモ！！」  
「君はどうみても女の子だけどね、じゃあ……」  
その時、栗田のアゴに愛原のキックが炸裂した。  
「ブヒッ！！」

栗田はどこかへ飛んでいってしまった。  
やがて栗田が飛んでいったほうの空が明るくなった。  
龍之介はただ、びっくりしっつ見ているだけであった。  
「あんのロリコン！……お嬢ちゃん大丈夫？」

「わ…ワシは大丈夫じゃ、それよりお主は何者？」

「男みたいな喋り方するね、私は愛原あかね、近所に住んでるけど貴女は？」

「わ…ワシか？ワシは坂上龍之介、別名は猛虎龍之介でそっちのほうが有名になっているが、本名さ坂上龍之介じゃあ」

「りゅ…龍之介？男みたいな名前ね…」

「ああ、信じてもらえるとは思っておらんがワシはついさっきまでは男じゃった」

正直あかねにはそんな事信じられない。

（そういえばさっきその海にうかんでた女の子だわ…きつと頭うつたんだわ）

自分なりにそう解釈した。

「なあ、信じないか？」

「信じられないけど……」

「そうか、まあよい、ワシも信じられんからな」

（本当に大丈夫かしらこの子…）

現代の普通の、中学も卒業してこれから高校生だっていうあかねには信じられなかった。

龍之介もこんな服装をしている女の子がいるなんて信じられなかった。

しかし彼の趣味に当てはまることでもあった。

（乳…でかいなあ…ワシ好みかもしれん）

なにかほしそうな表情であかねを見つめていた。  
「どうしたの？」

「いやなんでもない！」

「そつ…」

「あああ！！見つけたわよ！！！」

「ん！？」

なんとそこには看護婦のおばはんがやってきた。  
相当起こっており顔にしわが寄っていた。

「勝手に逃げ出して！！！」

「う…ワシはもう元気じゃ！！！」

「だったらもう退院すればいいさい！！！」

「退院つてなんだかわからんがしたるぞ！！！」  
こうして龍之介は意味もわからず退院した。  
でも考えて見れば行き場がなかった。

「貴女、家は？」

「家か？ワシは旅をしとつてな、家は恋しいよ」

「つてどいよ！」

「秋津の地じゃったきがするな」



「い…いきなりゲームとかにでてきそうな人が降ってきた…」

蝉磨もそこらで売っているゲームにでてくるお待さんのような格好であった。

それもちよつと立派であった。

「坂上殿……私は坂上殿の屍をせめて埋めて差し上げようとしたのですが屍がどくにもなく、まさかと思ってもぐってもなく、もしかすると思つて自分も飛び降りてみたらこのような場所が変わり果てた坂上殿に……」

「蝉磨……良くぞ参った」

「…坂上殿！…：…そういえば坂上殿の幼女姿…かわいいですよお！  
！…！」

「えっ！？…：こりゃ蝉磨やめんか！！」

蝉磨は龍之介を抱いた。

「おお！…感触まで本物の女子！それも子供じゃ！…すばらしいですぞ…！」

「やめなさいロリコン…！」

あかねは蝉磨をぶん殴った。

蝉磨は鼻血をぶーつと噴射していた。

実は蝉磨、幼い女の子が好きらしいといふかなり危ない奴だ。

「蝉磨、以後ワシに1m以上ちかづくではないぞ」

「すみませんでした！」

「……なんなの？この人達？」

それから15分後…

「なるほど、我々は随分とおすごい世界に来てしまったようですな」

「まったくじゃ、だがなんでワシだけ幼女なんじゃ？」

「知らないわよ……でも貴女本当に男だったの？」

「みよこの筋肉を！！」

「坂上殿…ぷにぷにのほっそ腕しかありませんよ」

「……みよワシのすね毛を！！」

「坂上殿、脚つるつるですよ」

「……こまったなあ…アレはついとらんし」

「……とりあえずうち来る？許してくれるかはわからないけど」

「行くうか、どうせこの世界じゃあてもなか」

「そうですね」

「あんたはダメ」

「が〜ん!〜!」

こうして蝉磨はこの地でバイトをしつつ地道に生活する道を歩む事になった。

蝉磨は道路を歩いていて、しばらくして漁船がある場所に到着した。そしてこの世界の船は進んでいるなと感じた、なんせ蝉磨が考えられる範囲を超えている材質でできた船であるからだ。

「すごいなあ……………」

「兄ちゃん、バイト、やらないか?」

「ん?…はあ!?!」

なんとそこには白いツナギを着て陰部を露出している某いい男にそっくりな男がいた。

どうみても彼はガチホモにしかみえなかった。

「……………」

蝉磨は瞬時にしてこう思った、『これはまずい』と。

「嫌アアアアア!〜!」

「やらないか!いや!やらせろ!」

ズボオ!〜!

「アッ!〜!〜!〜!〜!」

どうなったかは皆様のご想像下さい。

そんな事が行われているところで空しくスピーカーから演歌が流れている。

一方龍之介達は。

「いいわよ」

(だいたい親がない子なんてほっとけるわけないじゃないの…)

「ありがとうお母さん!」

「まあうちはお父さんががっぱり稼いでくるし余裕はあるわよ、それとあんたの将来にも役立つかもしれないしね」

「なにそれ?子育て的な意味?」

「そうね」

龍之介にはなんの事かわからないがとりあえず子育て関係の話だとはわかった。

ちなみに龍之介は独身である。

「ところであかね、その子の名前は?」

「あっ!!え〜と……坂上龍之よ!」

「助がたり……」

その時あかねは龍之介の口をふさいだ。

(そういう名前にしときなさい、どうなっても知らないわよ?)

(うつ…しかたない、今日から龍之という名前にしといてやる)

「そう、龍之ちゃんね、宜しく。私は愛原美香子。まあお母さんでいわわよ」

「ええつと…宜しく願います」

「礼儀正しいのね、あかねとはまるで違うわ」

「ちよつとお母さん！」

これから猛虎龍之介にとってどんでもな生活が始まるうとしていた。

第一話 猛虎早速の危機なるぞ（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

## 第二話 猛虎の1日!?

翌朝。

「はあ…海は広いなあ…大きいなあ……すがすがしいなあ…」

「燃え盛るなあ」

ズボオ…

「アッー!!!」

蝉磨の雄叫びは鞆の裏中に響いた。

実質これに起こされた者は幾人もおつたそうな。

それよりもこの光景をみていた人は蝉磨を哀れにみていた。

「あゝあ、阿部の新の親父に狙われたらおしまいだっぺ」

「ああ、だれひとりまともでいられたものはいねえ、だいたいほモさ」

「いやだねえあつしは女子高生好きよ」

「なに!?小学一年生こそベストだろ!!!」

「このロリコンめ!!!」

港でこんな話が行われている頃龍之介（以下龍之）は寝室で寝ていた。

急遽用意された部屋はもう自立した姉がつかっていた部屋だ。

ちなみに龍之がこの家で過ごすことは父親ももうしっておりOKOKしていらしい。

そんな龍之、どんな夢をみているのだろうか。

…

…

…

「お帰りなさい、ご飯にする？それでもお風呂？」  
その時、龍之は若い男に押し倒された。

「ひゃあ…ダメ…」

…

…

…

「うおわあ！…！」

龍之は汗をかいていた。

そして気持ち悪いものをみた直後のような表情であった。

(ゆ…夢か…嫌な夢をみた…)

思えば龍之は昨日だけでもかなりのおどろきであった。

テレビも知らなければ電気もしらないし車も知らなければ…というよりこの時代の常識がわからなかった。

その時美香子が入ってきた。

「あら」

「あ、おはようございます」

「龍之ちゃん早いね」

「ワシは朝早いほうなんで」

「そうなんだ、じゃあ明後日からも問題なさそうね」

「明後日？」

「小学校よ、あかねから龍之ちゃん6歳だって聞いているし」

「なっ!？」

「お母さん安心だわ」

そういつて美香子は部屋から出ていった。

どつちやらなにか物をとりにきたようであった。

今の時刻は6時ごろ、朝早くであった。

それよりも龍之にとって衝撃であったことは自分が6歳だという設定である事だ。

(ワシが6歳!?がきんちよではないか!!!この天下の猛虎龍之介が!!!……………それより…小学校ってなんじゃあああああ!!!?)

まず第一に龍之は小学校がなんだかしらない。

第二にこんな服を着る事に龍之は抵抗があった。

「はあ」

その後龍之はあかねと美香子といっしょに朝食をとった。和風の朝食であった、もちろんご飯と味噌汁は基本だ。

「……………」

龍之は米だとはわかったがドキドキしていた。そしていざ口にいれると…

「うまい!うまいぞ!!!」

「そう、よかったわ張り切ってつくって」

「お母さんホント子供好きだよね」

「だってかわいいじゃないの、それにあんた育ててきたからなんとなくわかるのよ」

「そう」

それ以前に龍之は現代のお米のうまさに感動した。

ほかの飯も普段の飯と比べると比べ物にならないほど味がよかった。

「うまい!ワシこんな飯くったの久々じゃあ!」

「あらそうなの、おかわりあるわよ」

「ありがとうございます!!!」

まあ当然昨日の晩飯にも米は食ってるから味はわかるがおいしいのは何度食ってもであった。

龍之はこのようなうまい飯が普通の食事として出される事に本当に感動していた。

食後、龍之は部屋に戻った。

流石にパジャマでいるのもあれなので普通の服に着替えようとした。もちろん龍之には馴染みのない服だ、見たこともなければきたこともない。

龍之は着替え終え見知らぬ自分がうつるもの（鏡）で自分の姿を確認した。

「……この世界の服はすごい、見た目はあれじゃが機能的だ。うごくやすい」

今龍之が着ているのはあかねが昔着ていたものだ。

まだ綺麗なものを美香子が激選したらしくダンスには何着か入っていた。

もちろんこれから龍之の分も買わなければいけないが裸でいるわけにもいかないのとおりあえずはこれでよしとしたのだろう。

「はあ……しつかしなんでワシがこんな姿に……」

その時部屋の窓から急に光が入ってきた。

「な……なんじゃ!?!」

するとこの前のへんな爺さんが出てきた。

ブランコに乗って。

「ええ！？いま窓が光ったのになんで天井から!？」

「ワシは神だからじゃ、なんか文句がありそうなんでな、聞きに来てやったぞい」

「文句っておま！ありまくりじゃい！！なんでワシをこんな体にしたんじゃい！！！」

「それはな、お主の体は異世界へ移動する際にバラバラになっちまったから、代用品を1秒で創ったんじゃ」

自称神様の爺さんは髭を触りながら答えた。

もちろん龍之がこの回答に納得いくはずもない。

「代用品!?! いや待てワシは納得いかんぞ!!! 代用品にするんだったらもっとたくましい男にせんかい!!!!」

「そりゃあワシの趣味じゃ」

「爺も昨日の太い男や蝉磨と同レベルかい!!!!」

「っというのは冗談で、男の姿よりもその姿のほうで周りの風景に溶け込んでいるいる便利じゃる」

「いや便利じゃないぞ！体力ないわ排便しにくいわ!!!」

「ならばよい事をおしえてあげようっ!?! というより今回ワシはこれを教えるためだけにきたんじゃ」

「なんだ？」

爺の顔は急にシリアスになった。  
杖を持った右手を大きく上にあげてこういった。

「その槍をこう持ってワシや猛虎じゃ！！と叫べば3分だけ元の体に戻る」

「3分！？短！！」

「しかも正体を人にバラしてはならん、もしバレたら武将ガエルになっちまうぞ」

武士ガエル…某アニメのパクリなのか、とにかくこれは屈辱的な姿である。

だが…

「嘘、お前さんがどうなるかはワシも知らん」

「驚かすな自称神」

「まあ、基本的には身長115・2のアニメ声で羽 と似たような髪の色で八重歯があるだたの女の子じゃ」

「ワシから見れば普通じゃない！！だいたいワシの髪の色は黒だった！！なぜ変えた！！」

「偶然じゃよ、ではこの世界を守る為に戦ってきなさい、あと槍はワシが開発したカプセルに入れてあるから出したりしまったりするときは上のボタンをおしてくれたまえ、では！」

「どついう意味じゃい？これ待たんか！！」

そういつて爺はブランコにのって上に消えた。  
龍之は啞然としていた。

「……誰かワシに状況を説明してくれ……」

「坂上殿!」

「は!?!その声は!?!」

窓をみたらボロボロの蝉磨がいた。

「蝉磨!蝉磨ではないか!」

蝉磨はすっかりやつれておりもう体力的にも限界そうに見えた。

そんな蝉磨は剣使いだがその剣をもつのもやつとの思いといった感じだ。

龍之にはなぜこんなに蝉磨がやつれているのかさっぱり検討がつかない。

「どうした蝉磨!」

「大変でしたぞ……男に掘られるわ我々の通貨はこの世界じゃ通用しないわ走る鉄の馬に轢かれそうになるわ……とにかく貴方様を探すのにどれほど苦労したことか……おゝいおいおい……」  
蝉磨は泣いていた。しかもなさけない泣き方で。

「それでどうしたんだ蝉磨?」

「大変ですぞ!!私の後ろを!!」

「……な……なんじゃありやああ!?!?!」

なんと後ろを見たら赤鬼がいた。

酒を飲んでおりとても臭い……っというより龍之は酒に釣られそうになった。

「ワシにも飲ませろ!!」

この国では未成年者の飲酒は禁止されています。

「だったら助けてくれんか」

「はい？」

「私の家はドイツに占拠されたんです、そこから酒をもってきてくれないと私は…私は！」

「ど…どいつ?どこのどいつじゃ?」

なんと赤鬼は敵ではなかった。

それよりも龍之はドイツがなんだか知りたかった。

「まあなんだかようわからんが付き合っつてやるよ、1日で終わるんだったらな」

「多分1日です!お願いします」

「うむ、皇室に遣える者として人助けはすべしと陛下には言われておる、やってやろう」

「いいんですか坂上殿？」

「よいではないか、ワシは暇だ」

「では、参りましょう」

赤鬼は某を天井のほうにあげ雄叫びをあげた。  
すると龍之の視界が急に白くなった。

「な、なんじゃ!?!」

…

…

…

「いって……どいじゃいこは？」

「ここは私の家から500m離れた場所です」

「500mか、簡単じゃないか」

「いや……実はですね……」

この後龍之は今まで体験したこともない戦いを経験する。

第二話 猛虎の1日!?(後書き)

御意見、御感想などお待ちしております。

### 第三話 猛虎、1941で戦う

赤鬼の家は500m先だという、ちょっと寒いがいたって簡単そうな任務にみえた。

「陽はの家から酒をもってくればいいんじゃない？」

「大丈夫なんですかお嬢ちゃん」

「ワシをナメるな！これでもワシは猛虎龍之介とよばれてたほどだぞ」

「坂上殿、それは昨日までの事ですよ」

蝉磨がそうつつこんだ。

まあ実質はそうであった、現代日本じゃ知名度はないに等しいうえ実力も著しく低下している。

そんなただの幼女が猛虎とよばれる理由なんてなにもない、現に栗田にさえ負けそうになった。

「だが、500mぐらいどうってことないでしょ……」

グワーン！！グワーン！！

「ぎゃあああ！！な、なんじゃあ！？」

よくよく耳で音を聴いてみるとすごい音だ。

戦場のような…だが龍之が知る戦場ではない気が。

「ここはどこじゃあ！？」

龍之は赤鬼に訊いた。

「ここは1941年のソビエトです」

「ソビエト!? ソビエトってなに!?!」

「我が祖国です、しかし今ドイツの侵略をつけて…我が家も占拠されて」

「よ……よくわからんけど……寒!?!」

「冬ですねえ…でも死ぬほど寒いですよ坂上殿!?!」

ちょうど今、冬將軍の季節であった。

龍之と蟬磨にとっては地獄の季節だ。

「アホー! ワシ弱体化してるのに誰だ戦場に送り出せっていった奴は!」

「坂上殿が行くといっただんでしょ!」

しかもどこから飛んでくるのかわからないものが飛んでくる。まさに恐怖だ。

「おい赤鬼! あれにあたるとどうなるんだ!?!」

「まあ死ぬでしょう」

「死ぬ!?!」

「ねえ、ダメですか? やっぱりとりにいけませんか?」

「ああもういつてやるわ! ワシをナメるんじゃないぞ!?!」

龍之は袖をめくった。

しかし…

「……寒！！」

「よしなさい！」

早速龍之達は作戦会議を行った。

まず家は500m先、路面は雪、気温は-40度ぐらい。

周囲の状況はドイツ軍に包囲され僅かなソ連軍が抵抗している。

そのため弾が飛び交い極めて危険な状態である。

ここは龍之の常識を超える場所だ。

龍之の戦術はまったく通用しない。

「うーん、どうしてくれようかな」

「やっぱり……ダメですか」

「大丈夫だってワシらに任せろ！」

「だって……貴女ただの女の子じゃないですか」

「ワシは元は男じゃ……！」

その時、後ろから話しかけられた。

「死ねえええドイツ兵……！」

「げっ……おい蟬磨見つかったぞ……！」

「待つて待つて我々ドイツじゃないですよ……！」

「ん？……よくみれば、後ろにいるのはヤポンスキー（日本人）では



赤鬼はぶつとんでいった、そして本当に赤い液体が赤鬼から噴出した。

ドイツ兵に蜂の巣にされたのであった。

龍之と蝉磨はあせんと、その様子を見ていた。

「…帰ろつか蝉磨」

「たしかこの棒つかえば」

鬼がさつきまでもつていた棒を天にあげた、すると再び視界は真っ白になり気がついたら家にいた。

「いてえ！！」

「いたたた…あれ？おい蝉磨！ワシら戻れたぞ！」

「おお！！」

そこは龍之の部屋であった。

ソビエトとは違ってとつてもあったかい。

そもそも春であるし。

「では自分はこれで、自分がここにいると多分怒られるんで」

「ああ」

蝉磨はまだから外に出ていった。

15秒たつとアッー！っという声がきこえたが龍之は気にしなかった。

そもそもなにがあったかもわからないのでほつといた。

「はあ…疲れた」

その時扉があいた、あかねが来た。

「あれ？龍之、さっきどこにいったの？」

「えっ？ああいや、寝てた」

「寝てた？…うん、まあいいや。それより散歩いかない？どうせ暇でしょ、鞆の裏の道についても知つといたほうがいいと思つて」

「…うん」

こうして龍之はあかねと散歩に行く事になった。

靴は昨日美香子が用意してくれたらしい、龍之曰く機能的でうごきやすいらしい。

靴を履いて外へ出たら龍之とあかねは並んであるいていた。

「ほお…」

なにからなにまですごすぎて龍之は言葉すらでなかった。しかし楽しい時間はそれまでであったその時。

「あ！栗田！生きてたの！？」

なんと栗田が目の前に…なんで生きていたかは不明だ。

「昨日はよくも…」

「そうだな、俺の後輩をよくもやってくれたな」  
なんと悪そうな高校生2人がいた。

「どうしよう……とりあえず栗田はロリコンだから…龍之逃げて！  
！…ってあれ？」

一方龍之はというと民家の後ろに隠れて、カプセルから槍を出し叫んだ。

「ワシや猛虎じゃ……………!」

…

…

…

その時龍之の体が光った、なにやら力がみなぎる感じもあつた。光は5秒ぐらいつづいたらおさまった、その時龍之の視点が高く感じた。

服装もあれ、槍も健在、そう龍之は爺の言つとおり一時的に『猛虎、坂上龍之介』に戻つたのであつた。

「おおお!…なんと元に!…これならあの男どもを……………昨日の屈辱を!」

龍之介（音この時はこういうことにする）はすぐさまあかねのもとに走っていった。

あかねは服をつかまれていた、抵抗はしているが無駄に見えた。

そこへ龍之介が現れたのだった。

「待てい!!!」

「なんだお前!?!?! つてどこの武将だよ!?!?!」

3人でつつこんだ、もちろんそういわれたら龍之介はこう答えた。

「ワシは猛虎龍之介!!! 貴様らなどこの槍の鏑にしてくれるわい!!!」

「りゅ…龍之介?」

あかねは不思議に思った、似たような事を名乗っていた女の子が消えその直後にこの男が現れた事に。

男は顔立ちから決して若い男には見えなかった、しかし見た目からしてかなり強そうに見えた。

槍には自分の家の家紋と近衛の印があった。

もちろんなんなのかはあかねには解らないがこれもどこかで見た事があった。

「でえい!!!」

まず1人を槍で突き刺した。

「貴様ああ!!!」

ドンツ!!!

もう1人がかかってきたがそいつは突き刺されはしなかったが腹をやられた。

「工藤1号先輩と2号先輩!!!」

「次は貴様じゃ!!! 秘技!!! 『夢想乱突き』!!!」

この厨臭い技、ただ槍をつきまくるだけなのだが恐ろしく速い速度でやるから強い。

別に秘技でもなんでも無い。

ズズズズズズズズン！！！」

「ああ…あああ…」

バタン…

しかし一発も命中していない。わざとあてなかったのである。

よくみれば槍で突き刺された奴も負傷しても大丈夫な場所であった。

「弱者はワシに殺される権利などない、もうすこし修行してからかかってこい」

「馬鹿なの…お前が喧嘩うつてきたんだろ！！おぼえてろー！！！」

栗田は2人を抱えて敗走した。

「…」

あかねは啞然としていた。

ただ、目の前にいるおっさんがとても強く、勇ましく、たくましく、そしてかっこよく見えた。

あかねは、感謝の気持ちでいっぱいだった。

「あの！ありがとうございます…」

「なあに、ワシは男として、情けない者に当然の事をしたまでじゃ、それではそろそろ時間である」

龍之介は走って民家の裏に行った。

「…猛虎、坂上龍之介…強いわねあの人…でも龍之つたらどこに…」

「ねえねえあかね、今の人すごかったなあ」

「えっ？」

なんとちゃっかり龍之はあかねの側にいた。笑顔であった。

「あれ？…あのさ龍之、さっきの龍之介って…」

「ワシは知らないぞ」

「うっ…うん」

早速あかねは疑惑を抱き始めた。

でも常識的に考えてそんな事あるはずもないと思っていた。さてこの先どうなる。

第三話 猛虎、1941で戦う（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

だいたい龍之介の本来の強さは今回の通りです。

#### 第四話 猛虎、小学校へ行く！

その翌日、龍之の部屋にはいろいろなものが用意されていた。

ランドセルやらなにやら、小学校にいくのに必要そうなものが多数用意されていた。

つというのも明日から小学生なので美香子が用意してくれたものである。

ランドセルはあかねのおさがりだがすぐに変えてしまったため大変状態がいい。

あとは最近犯罪が増えているとかで防犯ブザーなんかもついていた。

「ひととおりのものは用意したわよ、教科書とかは学校で貰うからあとはノートとかその類ね」

「あ、はい」

妙にやさしいお母さん（龍之視点から見ても）である為龍之はかえって気味るがっていたものの2日目にもなるとすこしは慣れてきた。

「はあ……」

美香子が去ったあと龍之はため息を吐いた……

その時窓から見覚えのある顔が。

「ぎゃあああ……！」

「坂上殿驚かないでください！」

「なんだ蝉磨か……驚かせやがって。ワシもお前ほど若くないんだから」

「爺さんじゃあるまいし、それに今その体でしょう」

「これはしょうがないだろ、ワシが望んでなったわけではないんだから」

「坂上殿、私は今日、坂上殿がいかれるという小学校についての資料をもってきました」

すると蝉磨は箱の中から多数の本を出した。

どこで手に入れたのかは秘密、ただ金もないからかいけない方法で手に入れたらしい。

「ほお……こりゃまたまるで異国の文化だな」

「まあ、世界自体が違いますからね、私もまだ慣れませんよこの世界に」

「まったくワシらなんの為に、しかもワシだけ女だし」

ところで蝉磨が無傷でこの世界にきてしまったのはなんでと思う方もいらっしやると思います。が気にしないほうが吉だと思っ。

「なるほど…げっ！6年も通うのか！しかもその先半ば強制的に3年も中学とやらに!？」

「それがこの世界の、言わば規則というものらしいのですよ」

龍之はものすごくめんどくさそうな顔をしていた。

「猛虎龍之介と恐れられていたワシがこんな所に!？チクショー！

!……!……!……!」

「しょうがないでしょ、元の体に戻る方法を見つけるまでは小学生に成りすますしか…」

「うーん…実にめんどくさい」

ガチャ

「あっ」

その時、龍之、蝉磨に危機が訪れた。  
あかねが部屋に入ってきたのだった。

「あ！あんたおととい砂浜にいた怪しい人！」

「げえ！！」

「蝉磨の馬鹿！」

「…あ…貴方いったい龍之とどんな関係があるのよ」

「龍之？」

「ワシのこっちでの名前じゃ」

「ぎいええええ！！坂上殿そのような名前が！！」  
流石にそれには驚きであった。

そして蝉磨は即座にこの後なんて答えればいいのかかんがえはじめた。

ハッキリいって今回はピンチであった。

蝉磨の一言で龍之の正体がバレる危険性があるからだ。

「おい蝉磨…適当にごまかせ…」

「はいい……ええつと実は坂上殿は秋津の国のお姫様なんですよ、私はこのお姫様の付人であります野原蝉磨のほらのせみまろ、近衛師団の師団長であります」

「えええ！？龍之ってお姫様なの！！！」

ここで龍之がお茶を飲んでいたら嘔くところだろう。

オーバーな事に蝉磨は龍之のことを秋津という国のお姫様という設定にしてしまったのだ。

「こりゃ蝉磨！！！」

「しー！……いいんですかバレても？」

「うう…そうしとけ…だがお前近衛師団の師団長ってのはやりすぎではないか？」

「そういう設定です」

一方であかねはかなり驚いていた。

目の前の小さな女の子がまさかどこかのお姫様（実際は違う）だとは。

そして自分がなんだか失礼に思えてきたのであった。

「ししし…失礼しました！」

「いや、誤らなくてもいいけど、ワシも普通にしゃべってくれたほうが」

「そ…そう」

なんかめんどくさいことになったんじゃないかと龍之は思った。蝉磨になんかいつてやるうと思った…だがもう蝉磨はいなかった。「あれ？」

「あら、野原さんならさつき帰ったよ」

「えええ！？蝉磨め！」

あかねも最初は信じられなかった、しかし蝉磨のほうがどうみても大人なのに呼び捨てで呼ぶわこき使っているように見えるわ蝉磨は敬語で話すわ、あかねはなんとなく龍之が身分の高い人物だと思い始めた。

（やっぱり…本当にお姫様なのかしら？）

\*翌日\*

「あら可愛いわね龍之ちゃん」

美香子も絶賛、龍之のランドセル姿。

「さ、今日は入学式よ」

「う…うん」

（この返事の仕方、慣れない…）

「あの…私も高校の入学式なんだけど…」

「大丈夫よ、時間違うでしょ、車ではぱーと行ってぱーと戻ってくるよ」

そして、龍之は美香子の車に乗せられ小学校へ向った。  
小学校といえば皆それぞれの思い出があったりなかったりする場所  
だろう。

しかし今思えばなんて楽な場所だったんだと思う方もらっしやるだ  
ろう。

でも龍之にはそんなものはない、なんせ龍之の世界にはそんなもの  
存在の『そ』の字もないからだ。

つでその後小学校の体育館だかどこか新入生が次々と入場してきた。  
みんな先月まで幼稚園児だった子たちでまあ小さい事小さい事。

その中でも特別雰囲気があったのはなんにもしていないし特にド派  
手な服もきていない龍之であった。

やっぱりなにかが違う雰囲気であった。

その後は新入生の名前の読み上げが行われた。

ちなみに一番最初に呼ばれたのは龍之であった。

「愛原龍之、石原（いし）は『ら）莞爾……」

なんか某国の軍人のような名前の子供がいるがそれは気のせいであ  
る。

んでその後は校長による式辞、新入生代表による宣誓が行われ2年  
生だかが校歌を歌った。

「自由なる鞆の裏地区の不滅の団結は、大日本によって永久に堅め  
られた。万歳、人民の意志に築かれし 一つに進む雄邁なる鞆の裏  
小学校よ！ 栄光あれ！我らが自由なる学校、児童友愛の拠るべき  
砦よ。児童の旗、鞆の裏小学校の旗は我らを勝利から勝利へと導く」

「あ…相変わらずソビントの国歌っぽい校歌ね…」  
美香子は呆れながらこの歌を聴いていた。  
龍之もかわった曲だなと思いつながら聴いていた。

その後龍之ら新入生は教室へ移動した。

龍之はどうやらこの1年1組になったようである。

「はい、私が皆さんの担任になりました鈴木京子すずききょうこです、今回は先生として始めてですけどみなさんよろしくね」

今時いるかわからんような教師が現れた。

若く大学を卒業したばかりかのようなようだった。

その後はまあお決まり教科書やらなにやらが配られた。

まあ初日はこんなものであった、真に大変なのは翌日からだ。

「いつてきます」

途中まではあかねもいっしょにいる、道が途中までは同じだからだ。

シユタツ!!

「きゃあ!!」

「うわ!!なんじゃあ!!?」

「坂上殿、お友はできましたか」

「アホ、1日のできるか、だいたいワシはガキと付き合っ気などないわ」

「でも龍之、あんた子供じゃない」

「うっ！」

嫌でも子供扱いされる。

それが今の龍之の状況であった。

「そうですか…では私はこれで…ほっ…！」

「……蝉磨の奴なにをしに…」

ズボオ！！

「アッー！！！」

「なんだ？蝉磨の悲鳴が…」

「いきましょ」

「き…気にしたら負けか？」

この後龍之を待っていたのはめんどくさい小学校での生活であった。

#### 第四話 猛虎、小学校へ行く！（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

しかし小学校の入学式なんて…昔過ぎてか思い出そうと思っても覚えてませんね。

## 第五話 猛虎早速友出来た

龍之は小学校に行かなくてはいけなくなつた。

その為昨日入学、今日は実際にランドセルに物をつめて登校であつた。

途中であかねとわかれ、蝉磨と思われる人物の悲鳴を聞きつつこのままだと6年間世話になることになる鞆の裏小学校に到着した。

下駄箱に靴を入れ上靴に履き替え教室へ向つた。

龍之の教室がある1年1組はなんとうれしい事に1階、玄関入つてすぐ近くだ。

玄関には今同じような背丈の子が幾人もおつた。

(ワシはこんな奴らと仲間になりらなきゃならんのか)  
こう龍之は思っていた。

教室に到着するとまあ男は走つて遊んでいた。

(ふ、元気だな、子供は)

そついう龍之も今は子供である。

しばらくするとこのクラスの担任となつた鈴木が入つてきた。

「はいはい皆さん静かにね、ここは幼稚園じゃないんだからね」

(ガキはうるさいもんよ、ワシは違うが)

とりあえずは皆座つた。

龍之は退屈そつであつた。

(なんでワシがこんな子供臭い集団に…)

っというのを見た目は子供でそういう設定なので仕方ない。  
龍之のとしてのピンチはすぐに訪れた。

(自己…紹介、うーんこの世界じゃワシの名前は皆知らんようだし  
しかもこの体じゃ誰も信じてくれないだろう、すぐに考えなければ  
いや、別に名前とよろしくだけでよかるう…)

「それでは、今から皆に、自己紹介をしてもらいまーす」

鈴木は笑顔であった。

「さか……………愛原龍之です、宜しくお願いします」

ずいぶんアツサリであったが特に趣味とか言えとは言われていない  
為此でよかった。

出席番号2番は某軍人と間違えそうだがまったくの別人である石原  
莞爾(いし『は』らんじ)。

ここ1年1組は総員35名のクラスであった。

「渡辺亮介です……………」

最後の奴が自己紹介を終えた。

んで龍之はもちろん退屈そうにしていた。

(はよ帰りたい……………それよりワシはいつのまに愛原になったんじゃ  
? まあいいか)

つとその時、龍之の血を騒がせるような事態が発生した。

放送が流れついでにその後ハゲで眼鏡でちよつと体臭がきついでどっ  
かの先生が入ってきた。

(えっ? 不審者?)

「相手は刃物を持っています! 早く!」

「わかりました」

鈴木も慌てていた、だが龍之は違う。

刃物という言葉聞いて武人としての血が騒いできたのだった。

(よし！そんな奴ならワシが相手したる！！)

ドサクサにまぎれて龍之は教室から飛び出しトイレへ向った。

「ワシが猛虎じゃ！！！！！」

前に続いて2回目である。3分だけ元の体に戻り元通りの強さになる。

それはまるでウ　トラマンの如く、突如として不審者の前に現れた。

「ななな！！なんだ！？」

「貴様！！ガキに手を出すとは！！男の恥じゃあ！！！」

龍之介は槍を持っているだけでインパクトがあった。

この男はすぐに逃げてしまった。

「ひいいい！！！」

「……………」

教師達は啞然としていた。

突如現れた親父がただ怒っただけで不審者は逃げてしまったのだ。

「あ…ありがとうございます！！…あれ？」

お礼を言おうとしたらもう龍之介はいなかった。

一方龍之介は…

「…あと15秒か……………」

女に戻るのを待っていた、さすがにこの格好のまま戻るわけにはい

かないからだ。

ヒュユ...

「よし...」

3分たつて女になった龍之はちゃっかり教室に戻り最初からいたかのように振舞った。

「さてさて皆さん、先ほどはあんな事がありました、十分注意してくださいね」

「は〜い!〜!」

「なるべく複数で帰りましょう」

つというお決まりの言葉でその後龍之達は帰った。

一年生の最初の頃は終わるのが早いらしい。

その後龍之はもちろん下校中であった。

「しつかし... 蟬曆の奴は普段どこにいるんだろ?」

歩きながら毎回急に現れる不思議な男、蟬曆について龍之は考えていた。

部下なのは変わりないもののこっちの世界に来てからというものの突如現れてはいろいろ情報を提供してくれる。

今まで何気に旅を共にしてきたがこっちの世界にきて何者が疑いたくなってきたのであった。

「...や!〜!やめて!〜!」

「ん?」

女の子がなにか嫌がる声が聞こえたのでちつよと振り向いてみると

さっきの不審者がいた。

(あいつもしかするとさっきの?)

しかもその男がつかんでいる女の子は龍之と同じクラスの奴だった。  
(うーん、見殺しにしてもいいが……流石に人としてどうかと思う  
しな……仕方ない!)

龍之は戦う事を決意した。

「ワシは猛虎じゃ!!!……あれ?」  
男にならない。

「なぜじゃ!なぜ!?3分どころかなる気配もないぞ!」

その時、一枚の紙が降ってきた。

「…ん?……一度変身したら1時間の休憩が必要?なんじゃと!?!」

なんと男へ戻る行為は制約つきであった。

3分だけというだけでも厳しいのに一回戻れば1時間休まなければ  
ならないのだ。

これはウー ンよりも厳しい制約であった。

「…ええい!仕方ないわい!!突撃!!」

彼は槍を持って不審者を撃退すべく出撃した。

「待てい!」

「ん?」

不審者が後ろを振り向くと重そうに槍を構えている少女がいた。  
実際龍之、かなり無理をしている。

「あ…あの子もしかして…」

少女も気がついた、同じクラスにいた奴だという事に。

「お、お嬢ちゃんダメだよそういう武器をもっちゃ」

「構わん！！ワシは猛虎と恐れられた者！！山賊より弱い貴様など！！」

龍之は槍を不審者に突き刺そうとした。

だが力もスピードもなく簡単に槍をつかまれた。

「うっ！！」

「ふっ、さっきの武将気取りの親父よりよっぽど弱いわ！！」

(ダメか！ワシはやっぱりこの体だと弱いのか！！)  
その時。

「えい！！」

「うお！！」

さっき襲われていた女の子が体当たりを敢行、男はバランスを崩した。

「今じゃあ！！」

ズン！！！！

槍は見事男に突き刺さった。

男は激痛のあまり倒れこんだ。

「急所は外してある…ワシは無闇な殺生はせん」

「女の子とセ　ロスしたかった…かく…」

男は力尽きたかのように倒れこんだ。

今回はあの子のおかげで龍之はなんとか勝利することに成功した。

思い槍をぶん回したせいかな龍之は息が切れていた。

「ぜえ…ぜえ…」

(戦ってこんだだけ疲れたのは久々だ…)

「あ…あの！」

「…ん？」

「あの…さっきはありがとう…おかげでたすかったよ」

「…そうすつか…ハハハ…」

そんなことよりも龍之は今、腕が痛くてしょうがなかった。そして表情も疲れきっていた。

「あの…愛原龍之…っであってるよね？」

「え？…そうじゃが」

「…よかった、ありがとう」

こうして龍之は、同じクラスで多分龍之より僅かに背が大きいセミシヨートの女の子、笹井夏奈ささいかなと友になった。

まあ暇つぶし相手にはよいだろうと龍之も思っていた。

こんな感じで今日1日は終わった。

\*夜\*

龍之は風呂に入りながら考え事をしていた。

(……小学校か、まあどっちにしろ。元の体に戻る方法と元の世界に戻る方法を知る手がかりはなさそうだな……ワシはいつまでこの

体でいればよものじやろう)

その時風呂の窓が開いた、鍵がしまっていないのだろうか。

「坂上殿！私にも晩飯すこしだけ！……あっ！こりやまた、立派だったチ コがありませんね…失礼」

「……この…ド変態野郎が……！！！！」  
バキィ！！！！

「あれえええ！？アンタ前まで男だったろ！！」

「それとこれとは別じゃあ……！！」

龍之は蝉磨をぶっ飛ばした、そして気がついた。

(…はっ！そうだワシは男だった、なに恥ずかしがってるんだ？…不思議なもんじゃ)

この日、龍之はぐっすり寝たという。

**第五話 猛虎早速友出来た（後書き）**

御意見、御感想などお待ちしています。

## 第六話 黒豹真坂登場

一方、異世界の日本では…

「殿、ここに坂上殿のものと思われるものが」

「ん？…そうか、やはり坂上の奴、このあたりで消えおつたか、余はお主を失った事、大変悲しむぞ」

例の崖の近くにいる集団、坂上をで迎える予定でいた真坂がいた。真坂がいる場所までもうすぐだったのでちよつとした情報は彼にも入った。

実を言えば彼と龍之介は同期であった。

彼の名前は真坂由紀夫まひかのゆきお、龍之介と同年だ30代後半ぐらいである。龍之介とは違って鼻の下に髭はあるがほかには髭はない。

「殿！ここ！崩れ落ちた後が！！足跡も残っています！」

「ん！？まさか奴はここから落ちたのか！！」

「しかし……死体でしたら下の湖に浮いてそうなものですが……ないですね……」

「うーん、誰かがもっていったのでは？奴は相当有名人でもあるしい」

ところで龍之介は異世界では有名人だ。

では真坂はどうであろうか、真坂も有名人であった。

その強さから『黒豹真坂』と呼ばれているほどの実力の持ち主で権力もかなりのものだ。

みし…

「ん？」

「どうした小野」

「殿！足元！！」

「足元…ただの荒地だぞ？」

「いえ……その……ここ大変もろい場所みたいで……崩れかけてますよ」

「くずれ……？」

その時、とうとう岩が崩れ真坂は落下していった。

「ああああああ！！！！！！！！！！」

「殿おおおお！！！！！！！！！！」

「なるほどおおお死因がわかったぞおおお！！！！」

その言葉が、彼らが聞いた真坂の最後の言葉であった。

そして、龍之介も同様にここから落ちて死んだと確信した。

「ううう……」

\*一方現代日本では\*

「じゃあね龍之」

「うん」



2人は走って向った。  
刀は相当立派なものであった。

「こ…これ剣？」

「…多分、はっ!!」

龍之は刀に記されているものに気がついた。

(こ…これは真坂家の家紋でないか!……もしかするとこいつ…)

「どうしたんだいお嬢ちゃんた……おお、なんだ女か」

某イイ男にそっくりな男と某予備校に通う男に興味があることを除いてごく普通の男子高校生にそっくりな男の2人組みがやってきた。  
しかも…

「あっ!!せ…蝉磨!!」

「きゃあああ!!」

夏奈が叫ぶのも仕方ない、そこには白目をむいて舌を出して、全裸の蝉磨がいた。

「お…お前なんじゃあ!？」

「なあに?この人と知り合いかい？」

「俺達は、この人に食べ物を食べさせているんだ」

「りゅ…龍之ちゃん…」

夏奈は龍之の後ろに隠れた。

しかし蝉磨、哀れな姿であった。ケツからは血が出ている、痔なのかそれともこいつらに掘られたのかは定かではないがとにかくひどい姿であった。

「っで、どごやったらそうだったんじゃ？」

「んもあ、この人貧弱なのよ…ねえ阿部の新さん」

「ああ」

貧弱とかそれ以前の問題である気もするが、まずは今やってきた真坂家の家紋が記されている刀を持っている少女の事である。見た目からして龍之や夏奈と同年ぐらいであった。

黒髪セミロングなのはおいといて、服装もどこかでみたようなものだ。

「…っは！！坂上殿！！」

「うええ！！蝉磨！！その格好で喋るな！！！！」

「へっ？…いやん！！」

\*しばらくお待ちください\*

「ねえ龍之ちゃん…あの人と知り合い？」

「あ…あんまり関わりたくないけどな…」

「ひどいじゃないですか坂上殿！！」

「その名で呼ぶな！！」

「えっ？…はあ…」

5人は少女を見つめていた。

しかし2人は飽きかけてけていた。

「ねえ阿部の新さん。我々チ　「のない奴は…」

「そうだな、行くつ」

例の2人が去ると蝉磨は急に喜んだ。

「やったああ！！私は解放された！！」

まるで奴隷から解放された者のような喜び方であった。しかし龍之には気持ちがあった、元々男だからだ。

その時、少女が目を覚ました。

「う…ん…ん？」

3人の男女が見ている事に気がついて少女は驚いた。

「うわぁ！！………どこだ？余はなんでここに！？」

「…お前…その口調………由紀夫か！！久しぶりじゃのお由紀夫！！」

「えっ？まさかその口調…龍之介か！？…嘘だろまさかそんな変わり果てた姿に…」

その時龍之にピンチが訪れた。

「龍之介？」

「ああああ気のせい！！」

「？」

夏奈にはよくわからないことだ。

そんなことよりも変わり果てた姿になっていたのは龍之だけではない。

由紀夫もそうであった、なんたって今女の子なのであった。

「な……な……なんじゃこりゃあああー!!」

「ねえ龍之、知り合い?」

「えっ!? ああいとこじゃいとこ!」

「?」

その頃由紀夫はショックをうけていた。

美顔だと言われていた自分の顔が今、ただの女の子の顔に、しかもたくましい体はやわからかそうな女の子に…

そしてこんな嫌だと思い始めていた。

「…あの、龍之ちゃん? もうすぐ予鈴だよ?」

「えっ? あゝあゝあゝ!!!」

「急ご!」

2人は急いで学校のほうへと走っていった。

なんだかんだいって龍之も普通に生活なりすまししていた。

「……真坂殿、事情は私のほうからお話します。ここは日本という国らしくて我々の常識は通用しま………」

蝉磨は由紀夫に説明していった。

そして…

「んなの嫌じゃああああ!! 余はそんなの認めんぞ!!!!」

「いや、事実ですし…」

「……つまり余も小学校という所へ?」

「なりすますしかないですよ……」

「……………余はなぜ？」

「さてさてお前さんにも説明しないとな」

その時、噂の自称神の爺さんが現れた。

流石に真坂もこれには驚いた、龍之同様の説明を行い元の姿に3分だけ戻る方法も覚えた。

ますます事態はややこしくなっゆく、はたして真坂がこっちにきてしまった事は、なにかプラスでもあるのだろうか？それとも…

**第六話 黒豹真坂登場（後書き）**

御意見、御感想などお待ちしています。

## 第七話 猛虎の身体測定

それから1週間後の事。

真坂がどこへ消えたかは不明であるが龍之は普通に生活していた。

1週間たってようやく慣れて始めてきたものの我を失わないように龍之はいつつも心がけていた。

方や蝉磨は地道に働いて金を稼いでその金でいろいろやっていた。たまには…

「ひひひ…この金で…」

「ああ、俺もはらってやるから…」

「ん？……げえ!!」

ズボオ…

「アツー!!……!!」

こういうこともあったが家がない事意外彼はとくに生活には困っていなかった。

そんな頃、小学校ではそろそろあのイベントがある。

『身体測定』、喜びの場でもあれば不安になる場でもある。

ところで龍之、いくらでも食べている気がして太らないのかと思う方もいるだろう。

どうも神は優しくしたらしく食っても太らない体にしてくれたらしい。

そんな事を4日前に聞いた龍之は喜ぶばかりにいろいろうまい物を食っていた。

今日学校行く際もアイスを食っていた。

「龍之、あんまり食べてばっかりいると太るわよ？」

「大丈夫大丈夫ワシいくら食っても太らないんじや」

「……本当かどうか疑いたくなるけどうらやましいわね……私だつたらラーメン100杯食べる」

「ワシはなんでも食うぞ」

「そうね、成長期だから適度に食べて適度に運動しないとダメだよ」

「はいはい」

やがてあかねと別れ蝉磨がやってきた。

「坂上殿！……ってまた食べてるんですか？」

「いいじゃないかワシいくら食っても太らん体質らしいし」

「そりゃあ誠でありますか？うらやましいですな」

「誠じゃ誠じゃ！いやあ女になつちまったのは不満じゃがそれだけ  
はありがたいと思ってるぞ、それより蝉磨そろそろあっちへ行け。  
夏奈が来るぞ」

「おっとそうですね」

龍之は夏奈に蝉磨をあわせないようにと努力していた。

その理由は蝉磨のあの姿を見た夏奈は蝉磨がトラウマになってしま

つて一目見ただけで龍之の後ろに隠れたり気絶したり叫びながら蟬磨を叩くようになったからだ。

龍之は夏奈のためにも蟬磨のためにも2人があうことを避けるようにとじていた。

つというわけで蟬磨が去った15秒後夏奈がやってきた。

本日はすこし元気なさそうであつた。

「どうしたんじや夏奈？」

「だって……今日身体測定でしょ？……体重とかさ……」

「そうか？」

「龍之ちゃん気にならないの？」

「ワシあんまり気にした事ないぞ？」

「えええ！？…ある意味うらやましいかも」

「そうか、じゃあ夏奈も気にしなければよいではないか」

「ごめん、今からじゃ無理だわ多分」

(……猛虎龍之介…人間関係もかわつたようだな……)

この様子をこっそりと見ていたのは真坂由紀夫だ。

女子の姿になって以降旅に出たはずなのになんどここにいるかという理由は簡単。

『道に迷ったここはどこ、あつ戻っちゃった』ってことになったのである。

なのでこの世界での奴（龍之）の生活ぶりを見るために追跡を開始したのであった。

「よ…余もかわいい女子おなこと友に！いや恋人になりたいぞおおお！！！！」

「なあ〜にいつてんだあんた、あんた女子だべさ？」

「うっ…」

近くで水を撒いている婆さんにそれをつっこまれた。

真坂は校門近くまで追跡を続けた。

「うおおおおお！！！！かつわええ女子おなこばつかではないか！！！！」

真坂はかなりロリコン気味であった。

なので幼女龍之介（龍之）を見てみると抱いてみたくなったりしたらしい。

そんな真性ロリコンの真坂、ちよつと危険かもしれない。

「この世界ではブラジャーとかいう下着があるらしいが余はそんなもの不要！！乳も不要である！！股間の毛も不要である！！余に必要なものは幼い女の子である！！ワツハハハハ！！！！………余、なにをしとるんだろ？」

ようやく自分の言ってる事のくだらなさに気がついたのか真坂は急に大人しくなった。

「しかし小学校とかいう場所ではいっただいなにをするんだろっ？余は大変気になるぞ」

そういつてこっそりと校内に侵入し体育館付近にいった。

扉の窓から中が見えた、なんと今時ブルマー、ロリコンである真坂は大興奮だ。

「おおお！！！余はうれしいぞ！！あんなかわいい子たちがあのないかがわしい格好を！！こりゃあいいぞい！！！！」

見た目は6歳の女の子なのでまるで変態親父のようであった。その時。

ガシッ！！

「なっ！？なにをする！？はなさんか！！！！」

「ひっひっひ…わざわざ学校休んで来たかいがあつたぜ」  
なんと同じくロリコンの栗田がやってきた。

ロリコンという点では同種族だが今回の場合真坂が被害者であった。なんせ真坂は、今幼女の姿だからだ。

「ついでに学校のかわいい女の子全員貰っちゃおう」  
栗田はさらなる非行に出た。

一方中では…

「え〜っと、龍之ちゃんは115・2cmと…」

ドンドン…！！

「ん？」

ドン…！！

「えっ？」

「きゃああああ…！！！！」

栗田は刃物を真坂に突きつけつつ要求した。

龍之以外のほとんどの女の子は叫んだ。

「ゴルー先公！！女の子俺にちょうだいや！！！！」

「な、なんなのよあれ！！」

「は、犯罪者よ！！」

つという声があちこちから聞こえる、一方龍之はある事に気がついた。

人質になっているのが…

「あいつ…真坂じゃないか？」

ガシッ！

その時夏奈が龍之にくっついてきた。

「龍之ちゃん！！」

「ちょ、夏奈はなれんかい！！」

「うん…」

夏奈が離れた瞬間龍之は周りの視線に気がついた。

どいつもこいつもみんな龍之の事をみていた。

「な、なんじゃ！？」

「龍之、貴女前に夏夏を助けたでしょ？じゃああいつもやっちゃんて！！」

同じクラスの女子がそう龍之に頼んだ。

「アホ！ありや夏奈の協力もあつてだな…」

「皆さん大丈夫です先生方に任せてください！」

龍之はじゃあ任せようかと思っただが…

「おい猛虎！余を助けんかい！」

「げ！！」

「こりゃ！余とお前さんは同期だろ！！」

まずい状況になった、しかも夏奈も真坂のことを思い出したのだっ  
た。

「あの人龍之ちゃんのいとこの人じゃ？」

「うっ…」

さらに龍之が苦手としている黒江保美という奴までこうやってきた。

「あんた夏奈のこと不審者から助けた事あるでしょ、あんなメガネ  
デブやっちゃってよ」

「冗談じゃないぞ！だったらお前がやらんかい」

「い、嫌に決まってるでしょ！まああんたがやらなくていいのはた  
しかにそうだけど」

「あちよー！！」

その時変な叫び声が聞こえた。

こんな声で人を斬るのはただ1人、蝉磨である。

栗田は背中から血を噴射しながら倒れこんだ。多分死んでいないが  
ぱっとみ死んでいるように見えた。

「おお！蝉磨！よいところに来たじゃないか！！」

「旅に出たはずの真坂殿を目撃したので追跡してきたらこのありさ  
までしたので」

こういう時蟬磨は役に立つ。  
体もそのまんまならば実力もそのまんまである。  
若いながら実戦経験豊富な彼は別名「白虎」「猛虎の補佐」と呼ばれるほどの実力を持っていた。

まあそんな肩書き日本では通じないが。

「…うおお！！実ありがたいぞおお！！！」

その時真坂はなんでかわからないが龍之に抱きついてきた。

「ぎゃあああ！！！！！」

龍之は拒絶反応を起こしていた、なんせ真坂も龍之も元は男。これではホモ同然である。

「よいではないか、かわいいぞ！」

「き、きも！！きもちわるいぞ！！！」

「アホかお前ら！！！」

バキ！ドス！

真坂も龍之も保美にボコられた。

「なんでワシまで！！！」

「変な事してたでしょ、あんたも同罪でしょ」

「馬鹿者！ワシは被害者じゃ！！！」

「なによ爺気取り！！！」

「きどつとらんわい！！！」

「2人ともやめなさい！」

京子が止めに入った、多分あと10秒で戦闘状態になっただろう。その様子をみていた蝉磨はこう言った。

「坂上殿：見苦しい争いであります」

どうやら彼は龍之がだんだん子供化してきているのではないかと本気で思っていた。

第七話 猛虎の身体測定（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

## 第八話 かはつるみの巻

4月末のある日、この日は休日である。

なので龍之は家でゆっくりしていた。

あかねはなにやらいそがしそうであったが小学生特にやることもなく遊ぶ約束もしていない龍之は本当に家でぐーだらすごしていた。

「はあ、やる気でない……なにか足りんぞ……」

龍之はなにか足りないと思っていた。

その足りないものは男なら多分誰でもほしいもの。

『エロ』だ。

ただでさえ仕事の都合上そういうのとは縁がないのに小学生の体になってそんなのとふれるのが難しくなった。

しかし龍之も元は男、ほしい物はほしいのである。

なんでも最近龍之はこの世界にそんな欲を満たす本があることを知ってほしいと思っていた。

でもこの体だと確実に「ダメ！絶対！」と断られるので手が出せないでいた。

しかもこの家には男はおらずレスもないのでそういった雑誌などあるわけもない。

でも見れる事は見れる、あかねと一緒にお風呂に入ればいいだけだ。実際そうなのだがそれだけだと満足できないのが男だ。

なので龍之は非常に不満を感じていた。

「あの工口本とかいうやつがほしい、だがこんな体だそむりじゃ…誰か運良くもつとらんかな？」

つといつて外を見ると今や幼女である真坂がニヤニヤしながら歩いていった。

なんと彼が歩きながら読んでいる本はそれらしいものであった。

龍之の心に火がついた。

「おお…うおお…！あれじゃあああ…！」

龍之は窓を飛び越えて真坂に遅いかかった。

「由紀夫おおお…！それをよこせ…！」

「な！？龍之介…！」

バシッ…！

「ほう、よくワシの槍を受け止められたな」

「生憎だが余の反射神経はそのまんまだ、それに龍之介、貴様力がそうとう落ちているな、余もそうであるが貴様もそうなら条件は同じ…！」

真坂は刀を抜いた。

家宝の刀はよく磨がれているらしくとても切れ味のよさそうなものであった。

2人が戦った事は何度かあるが今回のようなガチバトルは始めてであった。

「勝負じゃあ…！」

「余はこの本を死守する…！」

2人は武器を構えたままにらみあっていたが…

…

…

…

「なあ、龍之介」

「なんじゃ!？」

「考えてみれば我々は力がない、なのにこんな武器で戦って勝負になるか？」

「それもそうじゃな…」

「ならば…」

真坂は剣を捨ててかかってきた。

「ならば素手で勝負だ!!!」

「素手で戦ってワシに勝てるんでも思ってたか由紀夫!!!」

龍之も袖をめくって真坂にかかっていった。  
そして小学生レベルの白兵戦が始まった。

…

…

…

…

10分後…

「ぜえ…ぜえ…」

「はあ…はあ…さすがは猛虎！余をここまで苦しめるとはやるではないか！」

「相変わらず動きの速い奴じゃ、だが力はワシのほうが勝っているようじゃな」

「ふつ、力も大事だがそれより大事なのは速度、すなわちこの戦いは余に有利！！」  
「バキィ！！」

\*しばらくおまちください\*  
さらに10分後…

2人の疲労は限界に達していた。  
血もでているし、女の子の喧嘩というよりも不良vs不良に近かった。

ただ、それを小1に見える元男の女の子がやっているだけで。

「…」

「…」

2人は睨み合っていた。  
互いにもう疲労は限界に達していた、つまりこのあとの一撃で勝敗がきまる…

「……隙あり!!!」

龍之は真坂にパンチしようとした、そして、命中した。

バキイイ…

「にゃあ!!!」

バタ…

「…ふっ…ふふふっ…女の体で始めて自分の力だけで勝ったぞい!!!さくてエロエロ…ってなんじゃこりゃあ!!!!」  
龍之がみたもの、それは期待はずれでロリものであった。  
いやらしい服をきた幼い子たちが何人もうつっていた。  
そもそも売っていいのかというレベルのものであった。

だが龍之はロリには興味ないので破いて踏んづけて埋めた。

「ああああ!!!なんてことを龍之介!!!」

「このロリコンが！」

「まったく、だが余は…今お主がかわいくてしかたないぞおお！！」

「やめんか！！」

バキィ！！

真坂は倒れた。

龍之は家に帰ろうとしたがその時…

「やったああエロ本手に入れたああ！！」

(渡辺亮介……出席番号35番、ほか真性の変態2名……)

「龍之介、奴らは？」

「うむ」

ガシッ！

『坂真同盟』！！成立！！

2人はさっそく渡辺らを追った、到着した場所は公園であった。  
男3人でいやらしい目でエロ本を読んでいた。

「由紀夫、ほしいか？」

「もちろんだ、余は大変ほしい」

「ならばかつぱらうぞ！！」

「うむ！！」

龍之と真坂は走って渡辺らに向っていった。

「な、なんだ!？」  
渡辺らは突然の奇襲で抵抗する間もなく倒されてしまった。  
鼻から血を流し意識があるかもわからない状態で倒れていた。  
なにて攻撃したかという地下国あつたわりと大きい石だ。

運ぶのに苦労したらしいがそれはなんとか命中し3人に勝利という  
結果をもたらした。

龍之と真坂はワクワクしながらエロ本をみた。

「どうじゃやうな……ぎゃああああ!!！」

「おえええ!!！」

なぜ2人が吐いたかというとそのエロ本に写っている女性は熟女で  
あつた。

それもかなり熟した感じの女性であつた。

ましてや人妻、2人には論外であつた。

「由紀夫!!！」

「龍之介!!！」

2人とも熟女には興味ないので破いて踏んづけて埋めた。

しかも徹底的に破き踏んづけて元がなんだったかわからないぐらい  
になつた。

2人ともものすごい怒っていた。

「なぜじゃあ!!なぜロリと熟女なんじゃ!!！」

「余はロリがほしい!!！」

「美人で若くて乳も綺麗でそこそこでかい奴がワシはいい!!！」

「なあにいつてんだべさ、あんたら成長したらそうなるだろ  
つと水をまいている婆さんにつっこまれた。」

2人はむすつとした表情になった。

そして真坂はとうとう諦めたのかその場から去ってしまった。

「はあ…ん？」

若い男が龍之の目の前を歩いていった。

そして本をおとした、エロ本だ、しかも龍之が求めていたものであった。

「……………うはは…ワシは最後に勝つ…!!！」

つというわけで龍之はそれをもって走って自分の部屋に戻った。  
それを眺める事にした。

「……………おおおおお!!…!夢のようじゃ…!!！」

この体になってから見る事はおろか買うことすら困難であったエロ本。

そもそも龍之にとってこれが始めてのエロ本。

あっちの世界にはなかったエロ本。

ものすごく嬉しそうな顔でそれを眺めていた、だが問題が発生した。

厳密に言えばそれは幼女になった時点ですでに発生していることであつた。

「……………女子のかはつるみのやり方がわからない…」

かはつるみ〓オナニー。

しかしそれでは折角入手したエロ本で快感を味わえない。

すなわち今回の戦い、戦闘には勝ったものの結果的に失敗している。

「か…かはつるみのやり方を誰か教えてくれええ！！！！」  
ガチャッ

「龍之？かわつるみってなに？」

「あっ…」

なんとあかねが入ってきた。

龍之はとりあえずエロ本をベットにしまったが聞かれたくない言葉を聞かれてしまった。

そう、かはつるみというやらしい言葉を。

幸いあかねはかはつるみがオナニーの意味だとはわかっていなかったでも、龍之はあせった。

そしてこの日の敗北は己の欲望ゆえのもの…屈辱的なものであった。

第八話 かはつるみの巻（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

## 第九話 猛虎 蟬鷹、そして悲劇と新たな敵？

5月、5月つたら日本ではゴールデンウィークたるものがありこの年は5連休だった。

みんなで旅行…っと思いきやあかねもそんな歳ではないし美香子は5連休のうち2日は出勤なのでどこも行く予定なしというこのつまらなさ。

まあ龍之は下手にどこかいくよりもここでごろごろしていたかったらしいが。

でも…

「暇…やっぱどこかいきたかったかもしれない…」

「そういう時はこの本を見る」

その時真坂が現れた、もちろん手にはロリものの本が。

「いるかあ…！」

バキィ！！

「にゃああ…！！！」

真坂はどこかへ飛んでいった。

「ったく…ワシもう疲れた…」

一気に疲労が龍之を襲う。

この世界にきて1カ月ぐらい経つがびっくりな事ばかりで毎日かわけがわからなく驚きの日々であった。

よえやく慣れてきた最近でもいろいろ事件があったりと忙しい毎日であった。

なので龍之はこの5連休はせめて体を休ませたかったのである。

一方外では…

「たたたた…助けてええ!!!」

「やるせろ!」

「阿部の新さん!奴をつかまえたら!？」

「30分掘り掘りだ!それよりも野原とやらやらせろ!!!」

「ひええええ!!!!!!」

蝉磨は阿部の新らから全速力で逃げていた。

彼はほぼ毎日この繰り返しでたまに掘られるのである。

そう、蝉磨は阿部の新らに狙われていた。

ケツを死守すべく彼は全速力で逃げていた。

10分後…

「ひい…はあ…逃げ切ったぞ…、はあ…あつ!坂上殿!!!」  
「たまたま龍之を見かけたので蝉磨は向った。」

「おお、蝉磨ではないか」

「いや坂上殿、どうですがゴールデンなウィークとやら…」  
「その時蝉磨は転がっている石につまづいた。」

「あああ!!!」

「げっ!!!」

「ガン!!!!!!」

2人はぶつかつた…

「いたた…アホ！気をつけんかい！！ん？」

龍之は蝉磨に説教しようと思った。

しかし気がついた、自分の体が蝉磨になっていることに。

そして目の前には自分だった女の子が…そう、よくありがちな入れ替わりであつた。

普通なら「俺の体返せ！」的な展開になるだろう、主人公側が。

だが龍之は違つた。

「……ツハハハハ！！蝉磨の体じゃがワシは男にもどつたぞおお！！！」

「えっ？ちよつと坂上殿！！！」

「ハーツハハハ！！これでワシはエロ本も買い放題だし酒も飲み放題じゃい！！！」

蝉磨の体になつてしまつた龍之は嬉しそうにどこかへはしつていった。

「ま、待ってください坂上殿！！！！それはこまりますよ！！！」

蝉磨も自分の体でいろいろされたら困るので龍之をおっかけた。

だが今の彼の体力は小学一年生、成人男性の体になつた龍之においつけるはずがなかつた。

一方龍之はまず書店に向つた。

「ふひひ……おお！！これじゃ！！これを求めていたんじゃ！！」  
久々に感じる、股間がみなぎってくる。

これは男ならではの感覚だ。



「坂上殿が欲をいってこんな事するからです!!」

「ワシは男として当然の事をしたまでじゃろ!! 蝉磨! とりあえず殺さないけど成敗してくれるわ!」

「さ、坂上殿! 私は抵抗しますよ!!」

再び2人は武器を向け合った、だがその時、3分が経過した。

ボン!!

「あつ…」

「…ふつ」

「お…己!!」

悪夢は突然訪れた。

効果がきれ1日は変身できなくなったのだ。

龍之の希望は完全に消えてしまった。

「あ…ああ…」

「残念でしたね坂上殿、では私はこれで」

「こら待たんかせみま…」

「アッー!!」

突然蝉磨の叫び声が聞こえた。

「どうし!!…げっ!!」

蝉磨は全裸だった、そう。

阿部の新に掘られてしまった。

龍之は周囲を確認した、幸いこれがトラウマになっている夏奈の姿はなかった。

安心したと同時にこうも思った。

(…ワシ、今回だけは女にもどってよかったかもしれん…)

多分あの姿のままだったら龍之が犯されていただろう。  
ゲイ的な意味で。

その後龍之は家に帰るべく歩いた。

すると向いから見た事ある男が歩いてきた。

「…ん？」

「あつ！！」

「げっ！！渡辺亮介！！出席番号35番！！熟女好き！！！」

前回龍之と真坂の連合軍にフルボッコにされた男集団のうちの1人である渡辺。

彼は小1だが中2並に変態である。

「お前は愛原龍之！この前はよくもやってくれたな」

「いや…ありゃあ由紀夫がな…」

「誰だよ！アホじゃねーのか！？とにかくその罪を償え！」

そっいつて渡辺は龍之の手をとってどこかへ連れてこうとした。

「これはなさんか！！」

「やーだよ！！！」

龍之は抵抗できなかつた。

抵抗するには力が足りなすぎる。

それは不意打ちすれば勝てるものの真正面の勝負だと渡辺には勝てない。

このままではなにをされるかわからない、なんとかしてこの状況から脱出せねばと龍之は考えていた。

だがなかなかその機会がなく公園の公衆トイレの裏につれてかれてしまった、ここは見えにくい場所であった。

なにやらいやらしい雰囲気であった。

「貴様！なにをするんじゃ！」

「黙ってる！！バレたらやばいだろ！」

「なんじゃ？いけないことでもするんか？」

「その通り！！！」

「こりややめろ！！！」

龍之は渡辺に押し倒された。

このままではまちがいなく性的な意味で犯される。

「へへへ…龍之…」

まだ平たい…というか小1だからほぼあたりまえだけどそんな胸を渡辺は触ってきた。

揉もうとしたが知れたものである。

「やめんか！！はなさんか！！！」

龍之は抵抗を続けるもムダであった。



もし龍之が元の姿だったらただのゲイである。

もちろん龍之は自分は男だと思っているので気持ち悪くなりはいた。

なんたつて彼には男趣味はないからだ。

「おえええ…ゲホツ！ゲホツ…ヴええ…」

龍之の顔色は青かった、HPが30ぐらいだとしたら今龍之のHPは1ぐらいである。

第九話 猛虎 蟬磨、そして悲劇と新たな敵？（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

## 第一〇話 / まさかの転校生

ゴールデンウィークがあけた。

思えば龍之にとっては衝撃だらけであった。

蝉磨と入れ替わるわ渡辺に犯されそうになるわ石原に突然キスされるわで…

しかもそれが影響で龍之は休み中顔色が悪かったという。

そして今日は登校日、一番気に食わないのは後ろが石原だということだ。

決して石原は見た目も中身も悪い男ではなかった、でもあれはどう考えてもおかしいと龍之は思っていた。

ましては自分は男でありあんなやつは論外だとも思っていた。

だってそれでは龍之も石原もホモだということになる。

さて今日は学校に行くとなにやら皆噂をしていた、龍之も気になるといえば気になるので聞いてみた。

「どうした？」

「龍之か、転校生が来るらしいよ」

保美がそう答えた。

龍之は思った（今日の保美はいつもよりは大人しい気が）と。

「なんでも龍之ちゃんと一緒に変な喋り方するらしいよ」

夏奈も友からきいたのかそんな事をしっていた。

つで龍之以外に変な喋り方をする幼女といえれば数えるほど、龍之には検討がついた。

そいつの正体はあいつである。

「ま…まさか…」

その時扉があいた、京子といっしょに見覚えのある女子がいた。そう、彼こそかつて黒豹と呼ばれていた真坂由紀夫だ。

「ま…まさかの真坂…！」

「余は真坂由紀まつかゆき、その龍之とはいとこである」

「き…貴様…！！！」

「……ハハハハハ！！」「……」

龍之は急に恥ずかしくなった。

しかも真坂由紀という女っぽい名前はなんなのだと思った。自分もそういう名前にされたのだが…

幸い由紀（以下女の場合由紀、男の時は真坂と記す）とは席が離れていた。

つだがこれから先めんどくさそうな事になるのは目にみえていた。

…そういえば今日から地道に運動会の練習が始まるらしい。

「体を動かすのか！それならワシが優勝じゃ！！」と大人の龍之ならいっただろう。

前はそういう豪快キャラであった、だがこの体ではそんな事いって也不可能なので龍之は大人しくしていた。

それにくらべて由紀は違った。

「余は動きだけは素早いぞ!！」

「ほんと!?!」

「足速いの!?!」

「多分!!!」

龍之はその光景を呆れながらみていた。

そしてこう思った。

(…今の自分の体を考える…多分無理じゃと思う)  
2人とも元は武将、本当に強くそれを自慢するのは簡単な話  
でもこの体だと説得力ないうえ本当に弱いのである。

んで今日の4時間目とやらにその運動会の練習?があった。

1年生とは何m走るか覚えていないがとりあえず50m。

ちなみに1年生女子の50m平均タイムは11.93秒らしい。

体操着姿の男女が列になって並んでいた。

「え〜っと、これから運動会の種目の一つでもあります…50mの  
タイムを計ります」

京子は新米ながらもがんばっていた。

新米は新米なりに独自で勉強しまだわからないことはたくさんある  
が教師として真面目にはやっていた。

まずは龍之含む4人が走るそうだ。

(あゝあ、ガキにむきになるのもどうかだが今のワシはこの通りだ

しなあ…)

「よーい！ドン！！」

4人は一斉に走り始めた。

最初は龍之が先頭にでた。

「龍之ちゃん速い！」

(おっ、ワシ以外と足速いんじゃないか!?)  
っと思っただけどその栄光はすぐになくなった、最後の10mで石原が龍之を抜いていったのである。

「げっ！！己えええ！！！！」

龍之も全速力で走って抜きにしようとした、でももうゴールだから無駄なあがきにおわった。

「えーっと、愛原さんが11・01で石原君が10・82、すごいわね2人とも平均以上よ」

一方ゴール地点では…龍之は完全につかれきっていた。

「ぜえ…ぜえ…なんじゃ?…歳か?それとも弱体化か?」

「大丈夫か?」

「ああ?」

そこには石原の姿があった。

それはいつぞやかのように微笑んでいた。

「……ワシは大丈夫じゃ」

「そっか、早く戻る」

「…しゃあないな」

(あ…あっちへ行ってくれ!!!)

あの事件以降龍之は石原の事が嫌になっていた。  
もちろんアツー！的な意味で。

ちなみに一番速かったのは悔しい事に渡辺であった。

そして威張っていた悪に遅かったのはかつて黒豹真坂と恐れられていた由紀。

平均的だったのは夏奈や保美であった。

どっちにしても龍之は足は速いほうであった、子供の頃は足が速いだけでもてはやされる。

ほぼ平均に近いあるいはそれより遅かった女からこの日、龍之はさらに支持率があがった。

一方で男もあいつすごいんじゃないかという事になった、龍之は同い年の男の平均よりも上であった。

龍之はたしかに弱体化したが同年代と比べると多少強いようであった。  
た。

んで由紀は…

「よ…余はこんなに足が遅かったのか？」

「馬鹿野郎、調子に乗りすぎじゃ」

「畜生…お前と余は同期、なにが違うんだ」

「お前、ただアホなだけなんだろう」

「ひどいじゃないか」

その後体育の時間が終わり待ちに待っていた給食であった。  
給食でも以前食べていた食事よりはうまいうえに勝手にかわりも  
できるというのだから龍之と由紀にとっては天国であった。

ちなみに由紀もいくらたべても太らない体質にされたい。

「よっしゃああかわ……ないし……！」

渡辺がおかわりしようとしたときにはすでに2人に食い尽くされて  
いた。

「ち……チクシヨ……！！……おっ……！」

その時リンゴが1個あることに気がついた。  
それをもっていった。

「ぐふふ……リンゴとやらはうま……あれ……！」

続いて龍之はリンゴをとりにきたがもうなかった。

（わ……ワシの食い物を……！）

龍之は席にもどった。

「どうしたの？」

向の女子が訊いてきた。

「リンゴがない……」

「龍之ちゃんほんとすごい食欲だね、でも太るよ？」

「ワシは太らない体質らしい……」

「うそ……でも便利ね」

その会話を聞いていた男はこう思った。

（太らない 多分ずっときれいなまま）

「おおお…」

しかし龍之は元気がなくなっていた。

リンゴを確保するという作戦に失敗したためであった。

「ワシのリンゴー!」

「いや龍之ちゃんのじゃないでしょあれ…」

「そうだけど、でもお前は取られたら悔しくないのか？」

「それは…食べたいものがなかったらあれだけど…」

「なあ、リンゴいる？」

そう話しかけてきたのは石原であった。

しかも口はつけていないものだ。

「えっ? いいのかお前？」

「いや、なんか見てたら食べづらくなったし…」

「おお、すまんのお!」

龍之は嬉しそうにリンゴを食べた。

ちなみに石原は微笑んでいた、もしかすると思ったのは保美であった。

こゝっそりとその光景をみていた。

(もしかして莞爾の奴……龍之の事が?)

ありがちである、しかしそれは龍之にとって困る。

何度もいう通り龍之は元男、これではただのホモであった。

そんなこと一切認めない龍之は当然嫌がっている。

「どうしたの保美？」

「えっ？ ななな、なんでもない！」

夏奈に話しかけられたが適当に彼女はごまかした。

そして…今日の夜…

\*愛原家\*

「んじゃ、おやすみ龍之」

あかねがドアをしめた、もちろん寝るので灯りはついていない。

「………どうでもいいが、女のはつるみのやりかたがまだわからん

…」

今の龍之にとってかはつるみのほうが大きな問題であった。

第一〇話 まさかの転校生（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

## 第一一話 龍を探せ

5月のとある週末。

中休み時間の事であった。

中休みとは2時間目と3時間目の間に設定されているらしいぶつこの休み時間より長い休み時間である。

小学校にはある場合が多いらしい(っというか知らん)が中学以降はみられない。

だいたい15分〜20分ほどである。

しかも小学校だとこれにくわえて昼休みもあるというのだからなんと楽な事であろう。

しかも今日は4時間授業だったのであと2時間勉強して給食食って変えるだけだ。

そんなお時間の事である、龍之の友の1人である中川琴音なかがわことねがこんな事をいつてきた。

「ねえねえ、皆、もし本当だとしたらすごい話手に入れたよ」

「なに？まさか宇宙人がでるかというんじゃないよね？」

そう訊いたのは保美であった。

また龍之もそうであるように保美も信憑性がなさすぎると思ったのだらう。

「学校の裏のほうにある山にさ、龍がいるって話」

「ええ、すごいじゃない」

夏奈は感激していたが龍之と保美は違った。

考えて見れば2人は仲は悪いが現実的といえはそうであった。

「だ…誰から聞いたんだ琴音？」

「えーっと、由紀だったかな？」

「ゆ…由紀？」

(つまり由紀夫のやろつか…信用できんぞ…)

由紀の常識がこの世界で通用するものではないのは明らかである。

もしかするとこの世界ではあたりまえのものがそういうことになったのかもしれない。

…まあ土日は暇である、行くというならばそれはそれでいい暇つぶしであった。

「そうだ！！余は聞いたんだ！！山奥の某所には龍が眠っていると！！」

「まさ…由紀、ワシはお前が信用できん、案外身近なものではないのか？」

「余は話をきいてついであるといわれている場所を聞いただけだ！余は見た事ない！っというわけで皆で龍探しに以降ではないか！」

「いいよ、おもしろそうだし」

「私も龍、みてみたい」

「えっ！？うーん……まあ暇つぶしにはなるかな」  
龍之はなんでみんなこんな奴のいう事を聞くんだと思った。  
今までの経験上、とくにこっちの世界にきてからというものの由紀  
と一緒にいてよかったと思った事はまだ一度もない。

（うーん……夏奈達をこやつと一緒に同行させるのは危険だろうし  
なあ……）

「なんだ？お主はいかんのか？」  
なにか腹立つような感じで由紀はそういった。  
夏奈らが由紀と行動するのは危険と思いついていこうとおもって  
いたのにかが同期生の癖にこんな事をいわれてしまったのは龍之の心  
に火がつくのも当然であった。

「当然ワシも行く」

「それでこそ男だ」

「あー、龍ちゃん女の子だと思っけど……」  
琴音はなぜか龍之の琴を龍ちゃんと呼ぶ。  
どこかにいそうな男の名前であった。

（元々男だが……）

行くのは休日、明日だ。

\*っというわけで翌日\*

「あ、龍之ちゃん！」

「よ…よう」

これで5人（1人元男、武将。3人普通の女の子、1人変態元男少女）全員が集まった事になる。

由紀が適当に書いた地図によればここをまっすぐいけばあるという。

「おい由紀…その地図は正確なのか？」

「余は知らん」

「それならワシの感のほうがあたってそうじゃ」

「まあよいではないか」

「迷ったらお前のせいだぞい」

しかしこの裏山。

あるいてみたらただの山であった。

しかも登山が簡単で小学1年生女子でも大丈夫であった。

現に普通の小学生の夏奈、保美、琴音はちゃんとしてきている。

変態元男由紀は龍之にとっては気に食わないことであるが先頭にたつて歩いていた。

「おお！噂によるとあれだ！！」

「あれ？ただの木造の建物に見えるけど…本当にあれなの？」

保美は疑っていた。

「余は知らんよ」

「ええ！？つじやあ中に農機具でも入ってたらなんのために来たのよー！」

「まあまあ、落ち着いてよ保美……」  
琴音が落ち着くよう保美に言った。

こういふシーンだと大抵誰か1人は怖がっている、今回の場合夏奈がその約になりそうだ。  
だが本当らにごく普通の森でしかも近くに登山道がある為まったく緊張感というものはなかった。

「由紀、誰に聞いたんじゃ？その噂？」

「水撒き婆さん」

「……」  
今までワクワクしていた夏奈や琴音も黙り、4人は沈黙してしまっ  
た。

まず由紀につつこんだのは龍之と保美であった。

「一番信用ならん人物じゃないか！！」

「あ、仲悪いのにハモってる！」

「案案外龍ちゃんと保美って仲いいんじゃない？」

「喧嘩するほど仲がいいっていうしね」

とにかくこの木造倉庫の扉をあけないかぎりには正体が不明だ。  
龍之は由紀に扉をあけるように指示をした、当然由紀は断る。

「鍵がないぞ」

「ねえ、これなに？」

龍之と由紀が振り向くとそこには石碑のようなものがあった。石には文字が刻まれていた。

「おい、読め」

「ワシに命令するな……え〜っとこれは…國井達志、此処ニ眠ル…  
…誰じゃ？」

「人の名前ね…」

「も…もしかしてこの倉庫の中に人骨が！？」

「んなアホな！あるわけないでしょ！」

突然顔色を青くした夏奈、たしかにこんな碑があつてしかも山奥だしそんな事も考えられるといえば言える。

この碑はいたずらで実は殺人事件の現場でこの遺体はまだみつかつていないとか。

「おい！この扉、開くぞ」

「えっ？」

5人は中を見た、一見はなににもないがその中で目立つものがあった。

「こ…これが龍？」

「なんかイメージとは違うわね…」

「つてかこれ飛行機やん」  
保美がいうに、龍と言われていたものはただの飛行機であった。  
しかし水撒き婆さんは認知症気味であった、ボケているとしたらありえる話だ。

「なぐんだ、期待して損した…」  
夏奈も琴音もがっかりしていた。

「あんたらなにしてるっぺよ？」

「げっ!？」

5人が後ろを振り向いた時、噂の水撒き婆さんがいた。

「それ、さわってないな？」

「は…はい…」

その時、つい先ほどまで厳しい表情だった婆さんの顔が急に優しくなった。

「そうかい、まあ別によかったんじゃが、その少女にこの場所を教えたのはあたしだし」

やっぱり龍之は思った、由紀にだまされたと。

その後話をきく限り元々は1年前まで生きていた兄のものだったらしいが死後は婆さんが兄さんこと國井達志に代わって整備を行っているらしい。

もっともこの婆さんがなんで整備方法を知っているかは不明であるしこの飛行機自体登録されたものなのかも不明だ。

「じゃあ…結局めずらしいものでもないのね…」

「そういうことだな、ただこの子がめずらしいものはないかと言っ

「だから適当な伝説っぽい嘘を教えただけじゃ」

「なにい！？余が聞いたのは嘘だったのか！！」

「ほら、お前のいう事は信用できん」

「そんな固いことをいうな猛虎よ」

これは完全に失敗であった。

だが、暇を潰すと言う目的だけは成功していた。

ここで発見された謎（？）の飛行機がまさか後々の戦いで戦力になるとはこの時誰も思っていない。

なんとって、こんな事をしているが猛虎龍之介が龍之として1年生になりすましているのは神曰くこの地球を救うためだから…

## 第一一話 龍を探せ（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

## 第一二話 / 記憶喪失？

帰り道…

「まったく、期待してホント損だった」

保美はそんな感じの事をずっとぶつぶつといていた。

「あれ？保美ちゃん期待してたの？」

「あつ！しし…してないわよ！！」

「はあ……こやつのを信用するほうが馬鹿じゃ」

「じゃあ…龍ちゃんも馬鹿ってこと？」

「うっ…」

そんな会話が行われている中由紀はなにか考え事をしているようだった。

龍之もそれに気がついてなにを考えているのか不思議に思った。

ただし、龍之はどうせロクでもないことだろうと思っっているようだが。

「なあ、皆」

「なに？」

「よくアニメで頭をうつたら記憶がぶつとんだりするだろ」

「なぜお前がそんな事をしているんじゃ？」

「まあまあ、それで余は思った。それは誠なのだろうか」と

その事を由紀は真剣に考えていたのである。  
確かに頭を強く打つとアホになる。

「つが漫画やアニメはほとんどが『嘘』である。」

「つまり信じている奴は『バーカ』というものであった。」

龍之もこつちらきて1カ月がたつたため1度はアニメなんかも見た事がある。

しかし実にくそ臭いことばかりであったので龍之にも嘘だとはすぐにわかった。

なので二次のものを本気で考えてる由紀をみて流石自分の仲間が一番の馬鹿だと思った。

そもそもこつちの世界では変な人を冷たい視線で見ると無視するという傾向にあるため龍之は由紀の仲間だとは思われなくなかったようだ。

「そんな事あるの？」

「うそぉ…」

「流石にないわよね？」

ごく普通の女子小学生である3人も正直微妙な反応をしていた。

「つだが由紀は馬鹿である、なにをしでかすかわからない、そう、  
なにか『しでかしたのである。』」

「つでは…」

由紀はちらつとしたのほうを見た、1mぐらいの段差があつて丁度いい具合に岩があつた。



「……あ…あれ?…」

龍之(?)は慌てた様子であたりを見回していた。

「な…なんか龍之ちゃんの様子おかしいよ?」

3人は不安そうにみていたが由紀は違った。

本当に記憶を失ったと期待していた。

(ふっふっふっ………どうやら本当だったようだな)

「あの…ここは?私たしか雪…」

わけのわからないことを言っている、どうやら本当に記憶をつしなっていた…っと思ったら。

「……大馬鹿野郎めええ!!!」

「ひええ!!!」

龍之は由紀に殴りかかった。

「なんで!?!記憶は!?!」

「失うわけないじゃろが馬鹿が!!!」

バキ!!!ボキ!!!

「…ありや殴られて当然だわ…」

保美は呆れながら殴られる由紀をみていた。

「やめい!!!」

「おっ?」

由紀は勢いよく龍之をぶっ飛ばした。

そして…

ガアン!!

「あつ!またぶつかった!」

今度は30秒ぐらいたってから龍之は起き上がった。  
またさつきと同じく4人を見つめていた。

「おい龍之!どうせさつきと同じ演技だろ!余にはもう通用せんぞ  
!」

「あつ!!あなた誰ですか!?!」

「へっ?なにを言う余は由紀であるぞ、お前が言うに由紀夫だ」

「えっ!?!えっ!?!」

今度は本当に龍之の様子がおかしかった。  
なので琴音は調べてみる事にした。

「よいしょつと……ねえ、貴女名前は?」

「えっ?名前?……わかりません……」

「えっ?」

3人は一斉に由紀のほうほみた、そして一斉に近づき一斉に殴りか  
かった。

「馬鹿!由紀ちゃんのせいで本当に龍之ちゃん記憶喪失になっちゃ  
つたじゃない!」

「お前はアホか!アホちゃうんか!?!」

「ぎゃあああぐええええええ!!たあああすけてえええ!!!!」



相当なやんだ末の回答がそれであった、しかもいつもよりも女々しい。

蝉磨はまるで瞬間移動したような勢いで由紀の所に言った。

「真坂殿、なにをされたんですか？」

「よ…余は悪くないぞ！科学の為の実験を…」

「真坂殿そんなキャラだったんですか、っというか実験って…？」

「頭を強くぶつと本当に記憶がぶっ飛ぶかっていう」

「貴方はアホですか…しかし大変ですなこりゃ」

記憶が全部ぶっ飛んじゃった龍之は蝉磨もあかねも美香子も、今まで自分が生活していた家もそこらの街並みも全部知らないものだった。

そんな環境にそんな状態にいるのだから当然怖いであろう。

「ほ、ほんとに記憶ないの？」

「……ごめんなさい、なにも思い出せません…」

「以前では考えられない反応ね」

「うーん、いつもならなんとかじゃとかって口調で喋るのに…」

あかね達は対応に困った。

なんたつて今までの人生で記憶がない人と接するのは始めてであるからだ。

そこで由紀はこういった。

「余は思った、もう一度同じぐらい頭に衝撃を与えればすべて思い出すんじゃないか？」

「死んじやったらどうするんですかい…」

確かに可能性としてはあるかもしれない。

だが今度こそ本当に死ぬかもしれないというのもあり蟬磨は止めた。

「どうするお母さん？記憶喪失って病院連れていっても治るの？」

「でも行ったほうがいいと思うし…あ、皆、お茶ぐらいならあるわ  
よ」

「あ、おばさんありがとうございます」

「いえいえ…お客様だし」

（おばさんですって？）

美香子は何気におばさんと呼ばれたことを怒っていた。

だが小学生相手にムキになるのも大人げないのでそれを表に出すという事はなかったが。

ただし、近所のちゃらい男におばさんと呼ばれた時はかなりその男にやったらしく以降その男は美香子を避けるようになりもし避けられない状況になったらさつきまでチャラかったのにいきなり面接中のような感じになる。

相当おそろしいことをされたのであろうがそれをいうと殺される。

「大丈夫かな、龍之ちゃん…」

果たして猛虎の記憶は戻るんだろうか、多分続く。

## 第二二話 / 記憶喪失？（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。  
多分すぐ記憶戻る。

### 第一三話 猛虎の記憶は何処

その翌日、今日は日曜で休みなのだがロリコン元武将（由紀）のせいで記憶を失ってしまった龍之はいつもとは様子がまるで違っていた。

いつもと違って妙に女々しくいつもどおりの豪快さが無い。

旅をともししていた蟬磨はそんな今の龍之を気味悪がっていた。

「しっかし…真坂殿本当になにをしたのやら…あれじゃあこっちが坂上殿と接しづらいではないか…」

「きゅあ！…！」

「ん！？さ…坂上殿どうしたのです…って…」

そこにはエロ本を持っている龍之がいた。

いつもなら喜ぶはずだ、だが…

「こ…これ、誰がおいたの…？」

「いや、それ貴女のもんですから…」

「ええ！？私の！？」

「そうですね、かはつるみかはつるみって喜んでたじゃないですか  
坂上殿…」

「……坂上って誰？」

龍之にはとりあえず今の名字（設定）を教えただけであって坂上と

いつもの知らない」というより由紀のせいで覚えてない)

(…そうか、なるほど)

「あの…実を言えば、貴女の名字は愛原じゃないんですよ」

「ええ!？」

「本当は坂上なんですけど…まあこの世界じゃ愛原しか通用しないようなので…」

「…よく…わんかない」

「はあ…」

蝉磨は本気でこいつの記憶を戻すにはどうしたらいいか迷った。

しかしいくら悩んだところでその方法は見付らない。

彼はひたすら考えた。

その頃夏奈の家では…

「どうしたんだろうな？」

と父親が言っていた。

そう夏奈が今日、部屋から一步もでてこないのである。

両親は心配そうにしていた。

「なにかあったりかしらね…?」

「聞いても答えてくれないしな…でもなんとかしてやらないと」

「うん…」

夏奈は相当ショックであったようだ。

自分の事まで龍之は忘れてしまったのである。

だがそれは龍之のせいではないので現時点では龍之に対してまったく怒っていなかった。

でも、夏奈が悲しむ子とはもつない、なぜなら龍之はもつ記憶を取り戻すからだ。

今日の夜、あかねが風呂から上がって牛乳を飲んでいた時の事であった。

階段のあるほかから誰かが転落するような音が聞こえた。

「な、なに？…ちょ！！ちよつと龍之大丈夫！？」

なんとそこには龍之が倒れていた。

どうやら階段から転げ落ちたようであった、だがこれが幸運であった。

「っは！？…こ、ここはどこじゃ！？あれ？あかね！！なんでこんな所に！！」

「……もしかして…よかった龍之！、大丈夫？」

あかねにもわかった、龍之の記憶が戻った事が。

その後龍之はあかねから今までの事を説明してもらった。

そして龍之にはある心が芽生えた。

（由紀夫…！！ぶち殺す！！成敗してくれるわ！！！！）

龍之は由紀に復讐しようと思っていた。

そして決心した、決行は『明日』と。

龍之を怒らすと大変である、由紀の運命はいかに。

END

「まだおわってないわ!!!!」  
まだ続きます。

龍之は走って由紀が生活するある場所へと向った。  
今の彼の頭の中はこんな感じである。  
(殺す!打ち殺してくれるわ!!!)

外からみても殺意丸出しである。  
一方その由紀は公園でエロ本でも読みながらゆっくりしていた。  
「…貴様アアアアア!!!!」

「なんだ!?余を呼ぶのは!?!?!げっ!!」  
そこには槍をもって龍之がいた。  
(も……もしや!?)

「よくもワシの記憶をぶっ飛ばしてくれおったな……」

「いやあ、あれは事故であった」

「頭を強く打てば記憶がぶっ飛ぶという話を最初にしたのは誰じゃあああ！！！！」

その言葉を聞いて由紀も剣を抜いた。

「しからばどちらが正しいか勝負だ！！！」

戦乱の世を生きた二人にとって最後に主張の正しさを示す。

それは戦いに勝利する事である。

またしても龍之vs由紀と言う組み合わせの勝負が始まるうとしていた。

第一三話 猛虎の記憶は何処（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

## 第一四話 決闘…そして戦乱へ

龍之は完全に怒っていた。

対する由紀も戦う事を決意した。

あとはどう戦いどちらが勝つかだ。

今同期が戦いを始める！

「ワシの記憶をぶっ飛ばした事を後悔させてくれるわー!!」

「そちらこそ余に喧嘩をあったことを後悔させてくれるー!!」

「ワシは猛虎じゃああああー!!!!」

「余は黒豹であるー!!」

2人はそれぞれ元に戻りフルパワーで戦おうとした。

2人の実力はだいたい互角、勝負の決めては3分以内にいかにダメージをあたえるか。

戻った時どれくらい戦えるかだ。

「行くぞー!!」

由紀夫が刀で攻撃してくる。

その速度は肉眼で捉えるのが難しいほどであった。

しかし龍之介も弱者ではなくその攻撃を槍で弾き返すのだ。

「ふふふ…やるではないか猛虎ー!!」

「そちらこそー!!黒豹と呼ばれただけはあるぞー!!じゃがお主には致命的な欠点があるー!!責様の一撃はワシには通用せんー!!」



しかし真坂は間一髪でかわした。

「ちっ！」

龍之介は槍を抜き再び持ち、真坂に立ち向かって言った。

今度は龍之介が攻勢をしかけた。

龍之介の槍は強力だ、防ぐのは簡単ではない。

「くっ！！相変わらず力はすごい奴だ！！」

「秘技！！『夢想乱突き』！！」

なんかダサく厨臭いこの技はものすごい威力であった。

それは流石の真坂も防ぎ切れないほどであった。

カキイイイン！！！！

「なにい！？」

龍之介は真坂の刀をぶっ飛ばした。

戦闘時間は2分50秒であった。

刀はものすごく遠くまで飛んだらしく10秒後に落下してきた。

それと同時に2人はまた幼女になってしまった。

「……ふっ、龍之介……いや女の子バージョンは龍之介か、余は嬉しかったぞ。あれほどの戦いが久々にできてな」

「ワシもじゃ、こつちの世界じゃあまり強い奴はいないがこの体だと思っ存分に暴れられないからの」

「まっただ、ロリがなんだかと我々はやっていたが、結局我々はもののふ武士。戦うのが本業で趣味も半ばそれになっている」

「ロリコンロリコンやってたのは貴様だけじゃろ」

「そうだったな、余はわりとこの世がお気に入りだ、かわいい幼女がいっぱいいるからな」

「警察に突き出してやるのか？」

「すまん、それだけは勘弁してほしい」

「さ、ワシは帰るとする。そのうちまた一戦やるつではないか」

「うむ」

龍之はその場から去ろうとした。

だがその時とんでもない光景を目にしてしまったのである。空を見ると無数の竜とそれに乗る西洋風の怪しげな騎士がいた。

「な、なんじゃあいつら?!?!?」

「俗にいう映画の撮影だろうか？」

後ろを振り向いた瞬間見えたのだから驚きである。

「いやああ!!」

「うるさい!!来い!!」

「あつ!!夏奈!!」

ちよつと見るところを帰るとなんと夏奈が男に連れ去られそうになっていた。

その男の服装はやっぱり龍之達にとって馴染みない西洋の騎士のようだった。

夏奈は気絶させられ後竜にのせられ飛んでいってしまった。

龍之と由紀は止めようとしたが無意味に終わった。

「おそかったか…」

「そもそもワシら、明日になるまで全力は出せん、奴らも武人に思える、おそらく勝てないじゃろう」

「坂上殿！！」

その時蝉磨が走ってこっちにやってきた。

「おお蝉磨！！どうした！？」

「どうしたじゃないでしょ！！！これを見たら普通駆けつけますよ！！大丈夫ですか！？」

「ワシらは大丈夫じゃが夏奈が連れ去られた」

「なんでよりによつて、まあそんな事いつている場合ではありませんん！！それに見てください」

なんと怪しい軍隊（？）は鞆の裏を攻撃していた。ゲームにでもできそうな戦法で。

人々は逃げ惑っていた。

「……坂上殿、あれって」

「うむ、秋津の外にいと噂されている西の戦士か？噂程度でしか聞いていなかったが……」

「もしかすると西の戦士が新天地だと気がついてこの世を荒らすの

を阻止すべく我々はやってきたのではないのでしょうか？」

「可能性はあるが……この時代は進んでいる、なんでよりによって我々が？」

確かに日本がちょっと本気だせばあっさり倒せる相手である。

もし龍之や蝉磨の推測が正しいのならばなぜ自分たちなのか疑問に思った。

「余はこう考えた、同じ世界の者が始末すべしと……」

「なるほど、異世界の人間が主体となってやってはならんということか」

「そうだと思う、だとしたら我々を呼んだ理由などあるのか？」

「……よし、ワシは今回めずらしく、貴様を信じてやるとする」「あんまり長くもないけどまあ、うん……な始まった。

果たして拉致された夏奈を救出できるだろうか、そして突如現れた西の戦士の目的は？」

続く……かも。

第一四話 決闘…そして戦乱へ（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

## 第一五話 戦じゃ戦!

翌日。今日は月曜日であり登校日。なのだが例の事件で臨時休校になった。

そのためゆつくりなはずだが朝起きるのが早い龍之は早くにおきて朝のニュースを見ていた。

「女子児童1名が拉致されたとのこと。あの変な騎士みたいな集団は現在鳥取県に在るとの事ですが激しい抵抗で警察には手に終えないとの事です、家族の方々や周辺住民、そして進駐区域に近い鳥取県民は自衛隊の派遣を要求しており自衛隊側も出動する方針ですがハトちゃん総理はその意志はないとインタビューで答えます」

「今回の事件は大変遺憾であります、はやく解決してほしいものですが自衛隊については反発を避けるため出動は控える方針であります」

「先日のこの発言に対したった今入った情報によりますと東京や鳥取、そして鞆の裏でデモ行進が行われているとの事です」

テレビを見ていた龍之はこう言った。

「へえ、この世界にも国に使える軍隊というものがあるのか」

「まあ…一応だけどね」

「でもなんでこんな時なのに出勤しないんじゃない?」

「それは…龍之、大人の都合よ」

「なんじゃ、大人の都合か…ってそれじゃ解決できないじゃないか」  
警察も自衛隊もダメなら残るはひとつ。  
猛虎龍之介が幼女になっちゃった龍之、同じく黒豹真坂由紀夫が幼女になっちゃった由紀、そして坂上蝉麿。あと頼れるといえば夏奈の友達である保美と琴音ぐらいであろう。

龍之は朝飯を食い終わるとあかねや美香子の目を盗んで外に出た。  
そして公園に行き蝉麿と由紀という仲間を集めて作戦会議に乗り出した。

「さて、警察とやらと自衛隊とやらが使えないのならやっぱワシらがやる必要があるのか？」

「半分その為に呼ばれたんでしょ我々」

「だがどうするんだ、余は思うにこの数でしかもこの中の2人はほぼ戦力外。勝ち目があるのか？」

「うーん」

「……龍之ちゃん」

「えっ？」

その時龍之は後ろから自分を呼ぶ声があったので振り向いた。  
だが保美でも琴音でもない、龍之が一番苦手としている奴であった。

「げっ！！石原！！」

「困ってるの？」

「ワシはなんも困つとらん！」

「そうなんだ…龍之ちゃん、前から抱きついたりキスしたりしてるから…わかっているかもしれないけど…好きだよ」

「えっ」

その時石原は龍之を優しく押し倒した。

（ちょ！こやつは本当にガキか！？）

「おおお！！さ、坂上殿がピンチでありますよ！！！」

「まあまあよいではないか…」

石原は龍之の服に手を突っ込みあそこを触り始めた。  
しかも生であった。

「！！！」

「…おちんちんがないね」

「アホ！ワシは元はでっかいのが！！！」

「なんのこと？」

（このガキめ！！はっ！！？）

龍之はちよつと視線を変えてみた。

するとつとり目でみている蝉磨と由紀がいた。

「お前ら！！助けんかい！！！」

「あつ、ごめんなさい坂上殿、では!…斬!」  
ザグアウア!!

「あぎやああああ!…!!」

石原は痛がりながらどこかへ走っていった。  
突如訪れた危機を脱する事に成功した。

「ふう…あぶなくあのエロ男が始めての相手になるとこじやった」

「ふう、そうなればお主はホモである」

「だまつとれロリコンめ、それより本当にどうするんじゃ?」

「うぐん……」

その時、蝉磨は殺気を感じたのか後ろを向いた。

「はっ!?!」

「や・ら・せ・ろおおおお!!…!!」

「げえ!!阿部の新!!…!!」

某いい男にそっくりである阿部の新がやってきたのである。  
こうなれば大ピンチ、またかまを掘られるか!?

「「やめいホモが!!…!!」」

「ぼおつきいい!!」

「おぎやああああ!…!!」

しかし龍之と由紀が止めに入り事はおさまった。

蟬磨はとりあえず安心したが…

「まっくた、危ない所でした。しかし本当にどうしましょう…」

「うーん……」

「おっ！かわいい幼女発見！」

「へっ？」

その時、包帯を巻いた栗田が走ってきた。

しかも下半身全裸でちんこを丸出しであった。

「あっはは、やらせろおお……！！！」

「「いやあああ……！！！」」

「まったく……！我々が真剣に悩んでいる所をどうして邪魔が……！斬  
……！！！」

ザグウウウ……！！！」

「いつてえええええ……！！おぼえているこの前男とヤッていたちよ  
んまげ男……！！！」

「なんですつてええ……！私を怒らせるとは……！成敗してくれる……！  
……！！！」

「いやあああごめんなさああああい……！！！」  
ダダダ……

そういつて2人は追っかけこを始めた。

その様子をみて2人は完全に呆れていた。

「はあ……」

「こんなんで大丈夫なのか？」

「先が不安じゃ……」

10分経ってようやく蟬磨は戻ってきた。  
エロゲーとエロ本を沢山もってきた。

「なんじゃそれは？」

「戦利品です、それより作戦を」

「そうじゃな……ってまた邪魔が入るんじゃないか？」

「そうなれば余が……」

「ってさっきお前ワシと一緒にって女々しくなっていたじゃろ」

「そついうお主だって猛虎といわれたくせに」

「この姿だから文句なしじゃろ、それよりさっさと始めるぞ  
その時、龍之は背中に水をかけられた。

「冷た！！なにするんじゃない！！……ってこの前の婆？  
水まき婆さんこと國井さんがそこに突っ立っていた。  
なにかはいつてそんな鞆をもっていた。

「あんたたち鳥取砂丘を目指すのか？」

「鳥取砂丘？」

「あのへんな輩、鳥取砂丘へ行きおった。あいつらと戦うのかい？」

「まあ……」

その時國井婆さんは眼鏡を光らせた。

奇妙な光景だ、その直後、まあ、喋った。

「……そうか、さすが猛虎龍之介じゃな」

「えっ？なんでワシの名を？」

「私が教えたもん」

「へっ？」

そこにいたのはあかねと美香子であった。

なんで知っているか想像するとぞっとするメンバーだ。

「なぜ!？」

「だって、蝉磨さんから聞いたもん本当の事。だから最近あまり子供扱いしないでしょ。失礼かなとおもって」

「……おい蝉磨、あとで覚えてるよ」

「すみませんでした」

つというわけでとつくの昔に招待がばれていた龍之。しばらく黙り込んだが國井婆さんが始めに喋った。

「ゴホンッ、来なさい、いいものをくれてやるよ」

「いいもの？なんじゃ？」

「鳥取まで行くには十分な燃料があるじゃろう。行くぞ」

「えっ？あ…ああ…こりゃ蟬磨。おまえも来んかい」

「あっ、はい」

國井婆さんははたして一行をどこへ連れて行くのだろうか。

続く…かも。

第一五話 戦じゃ戦！（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

## 第一六話 / 過去の遺物

國井婆さんに案内される事数十分。

一行はとある山にきたが…

「ここ、前に来た山じゃないか？」

「うむ、この登山道は前に通ったな」

「2人ともここ来た事あるの？」

「ああ、ここじゃ、ワシがこの野郎に記憶をぶっ飛ばされた山は」

「ありや事故でな…」

つと龍之にとつては嫌な思い出のある裏山である。

ここに國井婆さんも絶賛する、西の戦士と戦うには十分な秘密兵器が眠っているという。

それは婆さんの旦那さんが生前有り金はたいて復元したものらしい、要はこの前龍之達が見た龍…かとおもったら飛行機だったってやつだ。

婆さんいわくあれなら竜にのっている竜騎士やあるいはジャンプして攻撃してくるファイナルフンタジーっぽい竜騎士にも対抗できるらしい。

しばらく歩くと到着した場所はやはり例の倉庫だ。

「ここなの？秘密兵器がある場所って？」

あかねが婆さんにそう確認すると、婆さんはこくと顔をうごかし

た。  
そして倉庫の扉が開けられるとそこには噂の秘密兵器、飛行機があった。

飛行機とは文字通り飛ぶもの、時には人を遠くへ運び時には戦争の道具としても使われる

20世紀に背理人類はそれまで試作されてきた飛びそうで飛ばない飛行機ではなく飛ぶ飛行機をつくるようになり現代ではジャンボのようなでっかいものまである。

そして現在、無人機もある。

龍之達の目の前にある飛行機は少し古いものらしい。  
まずプロペラがついているがかといってターボプロップでもなさそうだ。

「……ふっふっふっ、これはな、隼という飛行機じゃ」

「ええ？なにそれ？」

「はやぶさとはなんじゃ？」

國井婆さんがいう隼とはどうやら目の前の飛行機の事らしい。

國井婆さん曰くかつては軍用機だったらしい。

國井婆さんはわかりやすく皆に説明した。

「うちの兄さんがむかし戦争の時に乗ってたんじゃ」

「ほう、戦か」

「昔は軍用機として使われてたんじゃ、戦争なんかに使われおつた

が動きはいらしい」

「なるほど、戦える飛行機というわけか、っということはこれで西の戦士を倒せると?」

「わからんよ、相手も同じようなのをもっている可能性もあるし、第一搭乗員がおらんじゃろ?」

いわれてみれば、この一式戦闘機『隼』を操縦できるものはこの場に誰もいない。

國井婆さんはせめて兄が生きていればと思っていたがいくら悔やんだ所でそれは無駄な話。

結局この秘密兵器『隼』もただの動かぬ塊なのであるうか。

…それは違った、突然空が光って上からブランコに乗った神が現れた。

「だ、だれあんた!」

あかねは驚くと同時にものすごく警戒していた。

「ワシヤ神じゃよ」

「ええ?嘘つきなさいよ!!そんなドフに出てくるような神様がいるわけないでしょ!」

「残念だがこいつは本当の神じゃ」

まったく信じようとしないうあかねに龍之はそういった。

「う…うそ!」

あかねは衝撃のあまりしばらく黙り込んでしまった。

しかしこの神、下手したら志のように耳の遠い神だったかもしれ

ない。

でも実際そんなことはないのご安心を。

「いいことを教えてやろう猛虎、お主には特別に異世界の兵器を操れる能力をつけておいた」

「はっ?」

「だってお主、武人じゃろ?しかし槍だけじゃ、やり、きれんじやろっ」

「じゃ、シヤレのつもりか?」

「いや、真剣な話じゃ、そこでワシは異世界の兵器も使えるようにしておいた」

実にご都合主義的な考えである。

なんにしてもその能力さえあれば隼を操縦できる人がいるわけだ。

「っでも、飛行機ですよね?ってことは滑走路まで持っていかない  
とダメじゃないのかしら?」

っ和美香子はいう、隼のようなあまり滑走距離のいらぬ航空機で  
も滑走路がないと離陸はできない。

しかしここには飛行場はない、そこで神は…

「じゃあつくっちゃっわ」

「えっ?」

「ほりゃりゃのりゃー!……!……!」

その時空が急に暗くなった。

「な、なんなの？」

そしてものすごい勢いで落雷がこっちに。

一瞬閃光でなにもみえなくなったがそれも5秒でおさまりようやく視界が見え始めた頃。

舗装された1000mの滑走路があったのだ。

「う、うそおお!!!」

あかるも驚きである。

「な…なんなんじゃ？」

「坂上殿、我々長い夢でも見てるんでしょつかね？」

「できることならばよ帰って寝たい…」

つとはいつてもムダだ。

西の戦士を倒すまで彼らは帰る事も元に戻る事も不可能である。

そう、倒すまでは。

「では、乗りたまえ」

「急に紳士になるな」

威張る神にそう文句をたらしながら龍之はいやいや隼のコクピットに。

始めてみる計器類に慌てそうになったが大丈夫だった。

これも神が勝手に追加した能力のおかげである。

ちなみに足は辛うじて届いたらしい。

その理由は神がこっそり龍之がのっても大丈夫なように細工したか

らだ。

「っで？どつするんじや」の後？」

「え〜っと、回すんじや。ほれ蝉磨さんやりなさい」

「えっ？私ですか？どれを？」

「これだ」

命令されつつ蝉磨はエナーシヤを回したる

これを回さない限り隼は発動機を動かすことはできない。

バババ…

「おおー！！」

「坂上殿、そういえばなんで槍も？」

「ふっ、いざとなつたらこんなガラクタに頼らず槍で戦うわい！！  
っじゃあとりあえず夏奈助けてくるぞ、さつさとやつつけて元に戻るために！！」

そして龍之はスロットルを全開にし離陸を開始した。

本当に操縦もくそもしたことないのにやりかたがわかった。

さすがはなんでもありの神様であった。

「いっちゃんいましたね…」

「ただ…問題はひとつ」

「えっ？どうしたんですか國井婆さん？」

「燃料は片道分しかない」

「……アホ!!!!!!」  
「バキイ!!!!!!」

龍之は槍を持って行って正解だったかもしれない。  
なんせ、燃料は片道分しかないのだ。

第一六話 過去の遺物（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

## 第一七話 ウシが猛虎じゃ！

飛行すること数時間、巡航速度は約300km/h。

隼は軽快な運動性能を誇る戦闘機だ、神様からくれた能力によって龍之はそれをいとも簡単に操っていた。

「地図によるともうすぐじゃな」  
地形からしてそろそろ目的地であった。

一方地上ではかつての日本軍機が飛行している姿を新鮮そうに見ている人が多く存在していた。

中には軍オタもいてがんばって写真を撮ろうとしている姿もあった。

「……もうそろそろかな？」

龍之は風防をあげた。

ちなみにこの隼二型で機銃は12・7mm、速度は515km/hほどである。

「ん？」

気がつくと地上は砂浜、そして多数の龍が駐機していた。

よくよく見ればひのうと何騎かは上がってくる。

「きやがったな、流石にウシでも槍で空中戦はできん、この異世界の兵器とやらの威力を試させてもらおう！」

龍之は機体を上昇させた。

10秒ぐらい上昇したところで反転降下、12・7mm機銃×2が龍どもを襲った。

ガガガ…

「ふふふ、あの神の爺気がきくな、始めてなのになんともなくわかる

ぞ

龍之はそう呟きつつ一匹を撃墜した。

「なんだ！？あれは！？」

「速い！うわあああ！！！！」

「つてえ！！」

龍に乗った騎士は弓を放った。  
しかしあたるはずがなかった。

「くっ！！」

「おい！！後ろだ！！」

「なに！！！？うああ！！」

次々と騎士どもは龍之の隼に撃墜されていった。

「はははっ！こりゃ卑怯なぐらい強いぞ！！ワシのモーターにはあ  
わんがこれも戦！！許せ！！」

弱者を無闇に殺すのは嫌いである龍之。

しかし今度ばかりはしかたなかった。

それよりも龍之は現代兵器（正確に言えば近代兵器、70年近いぐ  
らい昔のお古兵器）の強さに驚いていた。

15分ほどの空戦で騎士どもは全滅してしまった。

「よし、あとは地上に奇襲！トラ・トラ・トラじゃ！！！！」

これは陸軍機、しかも戦闘機です。

っというかそのネタをどこで覚えたか疑問である。  
ところが龍之の運が尽きた。

ブスン…

「あ、あれ？なんで？なんでじゃ？」

突然パワーがなくなり速度も落ちてゆく。

そう、とうとう燃料が尽きたのである。

國井婆さんの言うとおり、隼には片道燃料しかなかったのである。

「なぜじゃー！！！！！！………ってかそれよりはよ脱出せんと死ぬん  
じゃろこれ？。よし！ワシは猛虎じゃあああ！！！！」

龍之は男に戻った。

3分だけ『龍之介』に。

「おらおおおお！！！！！！！！！！」

ブン！ブン！

槍を回転翼のように振り回し地上に降りた。

シュタツ！！

「よし…ここからが勝負じゃ、なんせワシは3分しかこの体でいれ  
ないんだからな、電撃戦の如く移動しなければ元にもどってしまっ、  
突撃！！」

龍之介はさっそく目標を定めた。

白い仮設住宅があった、彼はそこを敵の司令部であり夏奈が監禁され  
ている場所と睨んだのだ。

「あの男を迎え撃て！！」

「うおおお」

「ええい!! 甘いわ!!」

龍之介はその実力をものに次々と西の戦士達を倒して行った。

「うああ!!」

「なぜた!! なぜ俺達が東洋人ごときに!!」

「ぎゃああああ!!」

その時、龍之介を狙う男が1人、剣を振ってきた。

「くたばれい!!」

「しまった!!」

猛虎といえども油断はあった。

このままでは龍之介は斬られる…っと思いきや。

「きえええ!!」

カキーン!!

「なっ!!……畜生!!」

男は悔しがりながら逃げていった。

そこにいたのはなんと蟬磨と真坂であった。

「お主達……」

「あの婆から燃料が片道分しかないときいたものだから、我々も急いできました」

「そうか、真坂、お前いつ男に？」

「さっきだ、それよりはよ行動しないと戻ってしまっぞ!」

「うむ!」

「突撃!」

実力派三人があつまりさらに快進撃していった。  
そしてようやく到達した。

「よし、行くぞ!」

ボン!

「あっ」

龍之介は龍之へ、真坂は由紀へ戻ってしまった。  
どうやら時間切れのようである。

「しまった!!時間をかけすぎた!」

「くそ、これでは余も龍之介も力を出せん!」

「……しからは私が敵と戦います!!その好きに夏奈殿を!!」  
(ふっ……決まった)

「蝉脛……よかろう」

いよいよ戦いは最終局面を迎えようとしていた。

ドン!!

「なに!?!なせここまで!?!」

予想通りボスと夏奈がいた。

「りゅ、龍之ちゃん！！由紀ちゃん！！」

「よし、蝉磨、行け！！」

「おいつす！！」

蝉磨はボスに向っていった。

いよいよ、最後の決戦が始まる…

…

…

…

「待て！！私は弱いのだぞ！？やめんか！！」

「断る！！司令官は徹底的に叩く！！」

「話せばわかるー!!」

「問答無用!!」

「ザク!! ブスツ!! シャキィ!! ドドドド…」

「亜ぎゃあああいやああんうげええええ!!!!!!!!!!」

「すさまじい叫び声と噴射する血の横で龍之と真坂は夏奈を助けていた。」

「あ、ありがとう…でも」

「うむ、わかるぞ、ありゃトラウマになる」

「こうして、ボスをぶつたおし夏奈の救出にも成功した。」

「…だが真の意味でのボスはいっつではない…」

「しかし今回が最終回なので誰も知る事はないだろうっえ、その正体を。」

「…おい!」

「まだ続きます。」

第一七話 ウシが猛虎じゃ！（後書き）

御意見、御感想などお待ちしています。

## 嘘か本当か最終話？ 龍之と夏奈

「あゝ終わった終わった、っじゃあさっさと帰るとしよっぞお前ら  
由紀はもう飽きたかのような様子でそういった。  
無論龍之や蝉磨もあきたようすであった。

つで夏奈は感謝していた。

「ありがとう、龍之ちゃん」

龍之は微笑みながら笑ったが蝉磨と由紀は不機嫌である。

「我々は無視であるか……」

「畜生坂上殿だけ！あの顔なんなのよあの人男でしょ！？」

「くそお！こんな姿の余でさえ女性のふりはしたことはないのだぞ！  
！」

「けしからんですな！……っどうでもいいですがさっき倒した奴ら  
スボスですよね真坂殿？」

「そうだろ？」

この時蝉磨は嫌な予感しかしていなかった。

先ほどのボスと名乗る男はラスボスにしてはやたら弱すぎたのである。  
る。

なんとつて龍之介や真坂に劣る蝉磨が瞬殺できた相手である。

「しかし、あまりにもあつさりすぎやしませんか？」

「……それはあるが、まあそのうち神も迎えにくるだろ？」

「まあそうですね……」  
一行は帰り道を知らないので後で迎えに来るといったらしいあかね達を待っていた。  
何時来るかというところ龍之達がすべての敵を倒したと神が見抜くまでだ。

「……ねえ龍之ちゃん？」

「なんじゃ？」

「お迎え、来るんだったよね？」

「そう蝉磨はいつておつたが……」

「……こないね……」

夏奈は蝉磨を信用できない！っていつているかんじの表情でそう言った。

「……皆さん……夕日、綺麗ですなあ」

「どうでもいいわい蝉磨、それよりお迎えはどうしたんじゃ？」

「きませんねえ……」

つと蝉磨はお茶を飲みながらいった。

「……すべての敵を倒したはずなのに、おかしいな」  
一行は夕日を眺めながらただ、あかね達のお迎えをまっていた。  
しかし一行に来る気配がない。

すべての敵を倒したはずなのにおかしいと誰もが思っていた…その瞬間であった。  
ビッ…!!

「ぬっほおあああ!!」

その時なにやら光線が近くに、一行はなにかいると思った。

龍之はあたりを見回した、すると空に怪しげな奴が浮かんでいた。それを発見したのは夏奈だ。

「……りゅ…龍之ちゃん…あ、あれ!」

「えっ?」

ういていたのは、白と緑のつるつるな男(?)だ。

尻尾もある、後頭部付近から長い緑色の髪が生えていた。だが色と髪以外はどこかで見た事ある奴であった。

「お、お主は!」

龍之がそう叫んだ瞬間、蝉磨は奴の名を言った。

「ブ…ブリーザー!!」

「えええ!?!本当にそんな名前なのか蝉磨!?!」

「いかにも、私が鳥取砂丘の帝王ブリーザーです…」  
あっていた。

だからこそ、蝉磨はつつこみたくなった。

「つておいしい!!最後の最後でパクリですか!?!あれ『ドラゴンール』にいたよね?絶対いたと思うよあたしゃ!?!しかも鳥取砂丘の帝王つて…しょぼ!?!」

どこかでアレを読んだらしい蝉磨にはネタがわかった。  
まさかアレの敵キャラがやってくるとは誰も思わなかった。

「いつてくれましたね……ふん!!」

その時蝉磨は空中にういた。

「えっ?ちょ、おまwwwやめい!!」

蝉磨は上空高くにあげられた。

「なんじゃ?蝉磨新しい術か?」

「ちょ!!!つちが!!これ術じゃ…坂上殿おおお!!!!!!」  
ドカアアアン!!

それは、リリンのような大爆発であった。

「きゃあああ!!!!」

夏奈は滅茶苦茶怖がっていた。

「ど…どうするんだあれ?あんな術使う奴絶対勝てないだろ…」  
由紀は完全に諦めていた。

しかし龍之は違った、親友であり部下である蝉磨をぶっ殺されたわけだ。

怒りに怒って伝説の超戦士に生まれ変わったのである。

「……………」

突然、空が暗くなり始めた。

「な、なんだ?…お、おい龍之どうした?今日食った明太子でもあ  
たったか?」

龍之の様子に気がついた由紀はそう訊いた。

やがて空は暗くなり雷、そして砂が上に上っていくという奇妙な現象が発生した。

「うう……………ダアアアアアア！！！！」

龍之の髪はスーパーサ ヤ人3のようになり周りには黄金のオーラが。

つてどうみてもアレです本当にありがとうございました。

「な、またパクリか！？」

由紀は突っ込んだ、槍をもった龍之はブリーザーのほうを睨んだ。

「うっ……………」

「貴様アアアアぬつ殺す！！！！」

『ぬ』はわざとです、誤字ではありません。

龍之は恐ろしく速いスピードでブリーザーに飛びかかっていった。

「なに！！？」

「貫！！」

ザグッ！！！！

「ぎゃああああ！！！！ちなみに私の戦闘力は53万もありません！！10万ちょっとですぎゃああああ！！！！」

強敵ブリーザー、しかし圧倒的な力を入れた龍之の前には無力であつた。

着地した龍之は夏奈の所に行った。

「大丈夫か？」

「う、うん、龍之ちゃんは？」

「ワシは無事じゃ」

その時神の力であかね達が瞬間移動してきた。

「いてっ！！この爺瞬間移動できるんだったら龍之ちゃん飛行機に乗せる必要なかったじゃないの！！」

「まあまあ、戦死者1人を出したがほら」

この時龍之の変身は解けていた。

つでもあかねはとんでもないものを見てしまった。

「ええ！？」

なんと夏奈が龍之にくっついていてた。

「これやめんか！」

「もうすこし……このままでいたい……」

「……しょうがない奴じゃのお」

こうして、すべてが終わった。

結局龍之達は元に戻れずこの世界で過ごす事になった。  
だが……

11年後……

「はあ……流石に60代になるとこ、腰が！」

美香子がそう言っていた。

あかねはなにやらかつこいい男と一緒にいた。

「まあまあ、ほら帰ってきたよ」

そこにやってきたのは龍之と夏奈であった。

「ふう〜、とりあえずワシら高卒にはなつたぞ」

「ダメだよ大学ぐらいはいかないとこのご時世」  
あかねはそう龍之に説教した。

「大丈夫ですよあかねお姉さん、龍之ちゃんは私がしっかり教育します」

そういつて夏奈は龍之にやたらとなつてきた。

「やめい!!……まあ悪くないか」

いちおう女として生活中的龍之、ただし猛虎龍之介という志は捨てていない。

今もかつての精神と、新たに手に入れた知識で、生活している。

一方由紀はというと……

(ふっ… 銭湯はよいな…… 婆が多いが幼女も多い!!これぞこの体だからこそできる余の計画!!ブツッハハハハ!!……!!)  
ただの変態になっていた。

しかし、事新しくいえる事が一つある…

それは、変な悪党をぶつたおしたかつての英雄達は、今も健在だということだ……

天国…

文句を言う蝉磨さん。

「ってなにこれ?ハッピーなのかバットなのかわからないけど、50%以上パクリじゃないですか!!」

天界…

突っ込む神様。

「本当にごめんなさい、しかもR15でもないような、本当にごめんなさい」

商店の裏の家…

龍之に振られニート化石原。

「ダメだこりゃ」

今度こそ本当に…

終

嘘か本当か最終話？ 龍之と夏奈（後書き）

こんな終わり方でごめんなさい。

こんなお話でごめんなさい。

R15なんて適当に設定しちゃったけどあんまりアレじゃなくて「めんなさい」。

そして何気にPV1万突破。

皆様、こんな小説でしたが本当に「愛読ありがとうございます」。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7289i/>

---

猛虎龍之介

2010年10月15日22時39分発行